

「事ではない、神武天皇様の時から今日まで傳はりました日本人でも心が日本人らしくなかつたり邪惡な人であつたら其れは混血兒よりもずつと悪い事だと思ひます、私は五十になつた當に好い學問をしましたよ。」

「では櫻子さん、心の立派な娘だと仰有るんですね。」

「私の見る處ではね。」

「こんな淫奔をしましても。」

「其れは不可い事です、ですが寛によく聞いて細かい處まで解りました、寛が悪いのです、何から何まで寛が悪いのです、若い女を見ると不都合な事を考へずには居られない病だと常人が白狀して居ります、何といふ淺猿しい男でせう、貴方方にお聞かせするのはお耻かしい事です、實際寛は爾いふ悪い病があるのでございます、ですが其れを私が咎める事が出来ない理由があります、其の耻かしいお話もしなければなりません、寛の父はそれより以上でした、實際その當時は華族や政治家や天下の豪傑たるものは一人でも多くの妾を有つのが矜持であつた時代です、その激しい性質が寛に遺つたのです、それを寛ばかりの罪だと言へませうか、私の若

い時の事を考へても、私の傍に寄る男といふ男は皆んな隙さへあらたら弄さまうといふ氣で居た事が想ひ出されます、男といふものは爾いふ風にさもしいものです、其れを私が寛が十五六の頃からどんなに心配したか知れやしません、寛も自分で其れを氣にして用心をして居たらしいのですが、到頭こんな事になつてしまひました、寛は泣いて居ます、男泣に泣いて居ます、お父様の遺して行た悪い病に負けたと言て、泣いて居ます、櫻子さんに濟まないと言てね、櫻子さんに何の罪もないと言てね。」

久子は怨う言た時初めてほろ／＼涙をこぼした。子の罪を見るに付けてもじき良人の罪を想ひ出さねばならぬ。

「淫奔の罪は櫻子さんにもありません、ですけれども女は弱いものです、氣狂ひの様になつた男の腕力をどうして防げませう、のみならず心の底で少しでも憎からず思つて居る人に對しては死ぬる覺悟で争ふ事はむづかしい事です、可哀さうに若い人達は皆んな怨ういふ逃けるにも逃げられない渦巻に巻き込まれるのです、不品行はいかにも不品行ですが、そこを細かく考へてやるのは女同士の情ではありますまいか、寛の不行跡も憎いけれども私はそんな事にきまあ

の子を寧ろ可哀さうに思ひます、櫻子さんは猶ほ更らお氣の毒です、そこを察してあけて下さ  
いねえ宇多さん。」

『そんな馬鹿々々しい事に同情が出来るものですか。』と宇多子は笑つた。

『いや／＼お姉さまの仰有る事は實に道理だ。』と男爵は言つた。『まじめに考へると私にも爾いふ  
卑しい性質があつた、或はそれは女にも解らない事なのかも知れない。』

『枝葉の事は後にしやうぢやありませんか。』と宇多子はぶり／＼する。

『いかにも爾ですよ。』と久子は首肯して『どうか私のお願をね。』

『爾いたしますと貴方は麻生家が混血兒の血統になつても可いと仰有るんですね。』

『アメリカ人も日本人も人間に違ひありませんからね。』

『侯爵が承知をなさいますまいよ、それをどうなすつて？』

『止むを得ない事です。』

『侯爵が不承知でも？』

『はい。』

『それは寛の利益になりませんよ。』

『そのために麻生家が乞食になり下がつても止むを得ない事です、血統や家柄よりも二人の  
間が大切ですから。』

『まあお姉さまは？』

宇多子は餘りの事に驚いて口を噤んだ、そして肩から呼吸をして眼を睜つた。

男爵は只だ續けざまに溜息を吐く、瑠璃子は侮蔑された敵愾心で胸が一ぱいになつて居る、

そして宇多子は良人の不決斷、姉の小理窟に氣が苛々して居る、話が到底纏まるべくもない。

男爵に取ては最愛の娘を寛に娶はしてやりたい、が一方に何より恐ろしい侯爵の思惑を考へ

ねばならぬ。娘を幸福にしやうと思へば一家の破滅を覚悟せねばならぬ。九年前にロザリーを

捨て、宇多子を娶つた時の苦み、悲み、侯爵の壓迫が今更の如く眼前に擴がる。誤つた日本の

家族制度！ そのために自分が一生を棒に振てしまつた、同じ徑路を寛が履みつゝある、娘の

後子が履みつゝある。恨み、後悔、苦しみ、持たぬ不健全な、激しい恨み、法軍がある。

悠ういふ感慨は男爵の胸に重苦しい雲を漲らした。そして彼は悲しい顔をして、寛や櫻子

を、さういふ不決斷の個人としての苦しみ、持たぬ恨み、法軍がある。

悠ういふ感慨は男爵の胸に重苦しい雲を漲らした。そして彼は悲しい顔をして、寛や櫻子

目下どんなに苦んでるだらうと察した。

「だが、私はどうする事も出来ない。」

彼は恚う繰返すのみであつた。

次に宇多子は宇多子で又た矛盾した心持に惱んで居る。彼女に取ては厄介者の櫻子姉妹が寛の家へ引取られる方がどれだけ可いか知れない、又た瑠璃子のために考へても、愛のない良人、丁度自分の良人宗一の様な良人を有た處で、終生冷たく暮して行かなければならないから、此際快く思ひ断る方が可いのだ。

恚ういふ考と同時に一方に於ては、でも櫻子が寛の嫁になるのは何となく癪にさはる、毛唐人の癖に、立派な華族を良人に持つなんて生意氣だ、第一に腹が立つのは私の眼を窺んで大膽な不品行を働いた事だ、餘り私を馬鹿にしてる。

次に瑠璃子はより以上に頭が混線した。そんな男は捨て、も惜くない、恚ういふ心の叫びと同時に、併しこれは一時の過失だ、寛さんは確かに私のものだ、私を愛して居る、愛しては居ないまでも私には敬意を有て居る、敬意を有て居なかつたら、私の力で以て次第に私に服従す

る様にして見せる。三年前だつて随分私に夢中になつたのだから。

日は暮れた。

「何と言つても貴方が御主人ですから。」

宇多子はもう苛立たしさに堪りかねて言た。

「貴方に決めて戴きませう。」

「さあ、私はな……」と男爵は例の如くパイに詰めては掘り落とし又た詰めて居る。

「私も、何とか御返事を戴きたうございます。と久子も言ふ。

「どうも困つたなあ。」

途方に暮れた男爵の顔をちらと見やつて瑠璃子は初めて膝を進めた。

「私の口を出すべき場合ではないかも知れませんが、此の事件は私にも関係した事ですから私の考をも言はして頂戴ね。」

「あゝ爾ともく」と久子は言た。

「貴方にはお氣の毒で私は會はせる顔もありません。」

「いえ小母さん。」と瑠璃子は優しく両手を膝に置いて「私は思ひきりますわ、今では何よりも寛さまのために考へてあげなければならぬ事だと思ひますわ、ですから私達は自分だけの事は打捨つて、寛さまが幸福になる様にね、ねえ小母さん爾でせうと」

「あゝ、貴方は佛の様なお心だ。」と久子は眼に涙を浮べた。

「いえ、爾するより他に仕様がありませんもの、ですから私は櫻子さんと同寛さまと御結婚なさる様に皆が骨を折つて下さる様にお願ひしますわ。」

「とんでもない事を。」と宇多子は遮つた。

「お祖父様が何と仰有るでせう。」

「お祖父様の事は屹度私が引受けますわ。」

「あゝ、爾してくれませんか。」と男爵は拜まぬばかりに言つた。「あゝ、爾してくれると私も實に難有い。」

「でも私は不服でございます。」と宇多子も飽までも言張た。「私の實家の……血統が濁る事になりますと……」

「麻生家の事は私が萬事責任があるので、私が御先祖へ申譯をすればよろしい事です。」と久子は屹ばりと言つた。

「では爾いふ事に。」

男爵は急に元氣づいた。

「私は御免を蒙ります。」

宇多子はふいと席を起した。瑠璃子も席を起して宇多子の後を追ふと、温室への廊下で宇多子が待て居た。

「どうしてあんな事をお言ひなのですか。」

宇多子はぶり／＼して瑠璃子の顔も見ずに言ふ。

「だつて小母さん、戀人に對する犠牲よ。」

「まあ呆れた、そんな詰らない犠牲つてあるもんですか、私はもう／＼貴方の世話は致しません。」

「あら小母さん、私の心持も察して頂戴ね、あゝなつてしまへば私としては潔い處を見せる

よりの仕方がないぢやありませんか、未練がましくしてゐるよりも、戀人のために自分の戀を捨てたとなれば、寛さんだつて私の恩義に感じますわ、えい、屹度感じますわ、其れから先は私に屈服して來ます、其の次には小母さん、どうなると思召して？」

「まあ。」と宇多子は向き直つて瑠璃子の顔をつくつく見詰めて「本當に諦めたのぢやありませんの？」

瑠璃子は笑つて答へなかつた、而して氣輕に足を運びながら「私櫻子さんの御見舞に行て來るわ。」

「今時の娘さん達は本當に賢い。」と宇多子は後を見送つて獨り屹やいた。と直ぐに櫻子の室で晴やかな瑠璃子の笑聲が起る。

「御目出たう、櫻子さん、寛さまとの御結婚が確定してよ、私ね、随分小母さんを説法しましたのよ、何しろあの通り頑固で底意地が悪いんでせう、それに頭が古いんですから説法に骨が折れましたわ、でも骨折甲斐があつて私こんなに嬉しい事はない、矢張り新人でなきや新人と共鳴しないわよ。」

「あらお父様もお母様も承知して下さいつて？」

百合子の勇み立つ聲も聞えた。

「随分ひどい事を言ふ、私を頑固で意地悪で頭が古いなんて、まあすつかり私を悪者にしてしまつた。」と宇多子はぶつく口の中で唸つた。

## 六

結婚の事は決まつた、第一に心配して居た侯爵も表面的ではないが内諾の旨を瑠璃子から返事があつた。寛も櫻子も百合子も初めて愁眉を開いた。

併し夏の事ではあり早や五月に近いお腹の羅一枚に隠せども隠しきれまい、お腹の大きなお嫁さんを迎へる披露は面白くないといふ點から、披露だけは分婉後でも差支あるまい、それまでは仲の悪い宇多子と同居させるよりも、麻生家の邸續きにある貸家に移らせ、萬事久子母堂に寝てもらふ方が可からうとは瑠璃子の提案であつた。

麻生家の垣續き、而も枝折戸を付ければ裏庭から通ひ得る處に某博士の住んだ半洋館造りの家があつた、日本人と異つて外國に育つたのだから居間や寢室は洋風でなければならぬ、洗面所や化粧室、良人のある婦人用の寢臺、何から何まで一切の世話を焼いて猶ほ其の上に瑠璃子は朝の散歩や午後のお茶など凡て心のありたけを盡くした。

「あんなに親切な方だとは思はなかつた。」と櫻子は毎日の様に云ふ。

「私達は急に幸福になりましたわ、これも瑠璃子さまのお蔭ですわ。」と百合子も言ふ。

「實に變だ、あの女がどうして恚癡になつたんだらう。」と寛も思つた、で彼は或時此の事を母に言ふと、母は眼をしょほくさせながら微笑して答へた。

「大變に結構な事です、けれども私はね、瑠璃子は少し親切過ぎはしまいかと思ひますよ。」

「なぜですか。」  
 「若夫婦の處へ毎日の様に來るものぢやありませんか。それに前のいきさつもある事ですからね。」

兎も角皮肉で冷たい家庭から逃れて燃ゆるが如き愛の自由な生活に一轉した櫻子は眼に見る

その耳に聞くもの一つとして自分の幸福を讚美する様に思へないものとはなかつた。

彼女は朝早く起きて庭を散歩する、時には松の色涼しき境を歩きながら胸一ぱいに朝の空気を呼吸する、その中に百合子が起きて讚美歌を唄ひ出すと、邸の中は朝の光に黄金の様に輝やく、小鳥の啼き聲、木々の緑を吹く風、愛を囁やく垣根の白い花、其れ等に胸を躍らして居ると、百合子が食事を知らせに來る。二人で食べて笑つて、そして百合子が朝寢坊の寛を起すべく母家へ行く。時には母の久子が來て日本料理の仕方を教へる、禮式や裁縫と言つても眞木家で習ふよりも、久子の方がずつと簡便で實際的で趣味がある。

「お母さま〜。」と言つて百合子は恰ら小羊が母羊に従き纏はる様に從いて離れない、彼女が晝の間は大方母の家で暮らして居る、其の間に寛と櫻子は只た二人で暮らすのであつた、だがこれは大抵瑠璃子と三人になる場合が多い。

瑠璃子の訪問は實際時間定めずであつた。或時には朝、或時には午後、時に或ひはやつて來る。或日の夕方寛と櫻子は家の中のあらゆる電燈を消してしまつて、涼しい目臺に椅子を持出し二人は並んで腰を掛けた。此の日は夕方から何となく靜かです。

日ひで、夕ゆふ焼やけの雲くもは日ひが暮くれきつた後あとでも、ううつつすすりと天そらを薄うす紫むらさきに彩いろどつて居ゐた。本ほん當たうに愛あいの夫ふう婦ふうが更さららに愛あいを語かたり合あふべき情じやう緒じよの夜よるだと寃ひろしは思おもつた。でそれを櫻ちやう子じも微び笑せうして首うなづ肯うなづいた。

月光げっこうに顔かほを照てられながら二人ふたりは黙だまつて微び笑せうした、何なにを語かたるべき主しゆ題だいもないが、只ただ二人ふたりうして居ゐるのだと思おもふだけで満まん足やくであつた。二人ふたりの手てと手てが今いま更さらの如ごとく握にぎり交かはされた。如ごとく甘あまい和やはらかな喜よろこびが血けつ管くわんに溢あふれて互たがひの心しん臓ぞうの鼓こ動どうまで聞きえる様よう。

『あら眞ま暗くらでどうしたの？』

突然とつぜん瑠る璃り子この聲こゑが聞きえると同どう時じに電でん燈とうがバツと點ついた。二人ふたりの恍わう惚ぼ境きやうががらりと醒さめた。

『あら御ご免めんなさい。』と瑠る璃り子こは椅い子すから起たつた櫻ちやう子じを見みて室しつ内ないから聲こゑを掛かけた。

夫ふう婦ふうが月つきの下したにしみくとした氣き分ぶんで語かたりつゝある感かん興きやうの矢や先さきに突とつ然ぜんの來らい客きゃく！ 霎しはら時とき互たがひに鼻はな白しろみながら言こと葉はも出でなかつた。

『よく被い來らいつてね。』と櫻ちやう子じは嬌にやう然ぜんして見みせた。

『あゝく私わたし、今日けふはお寄よりしまいと思おもひましたけれどね、矢や張はりり一日いちにちでもお顔かほを拜はい見けんしな

ければ氣き持もちが悪いもんですから。』と瑠る璃り子こは平へい氣きに饒じやう舌ぜつり續つける、そして其そのの間あひだにも極きよくめて敏びん捷せつに二人ふたりの態たい度どに注ちゆう意いするのであつた。

『月つき夜よですから、露る臺たいへ出でて居ゐましたのよ。』と櫻ちやう子じは愛あい想そうよく笑わらみかけて『貴あなた方なたどつちの方が可いい？』

と草くさ花はなの團だん扇せんと美び人じん畫がわの團だん扇せんとを出だす。

『ありがとう、私わたし奇き麗れいな人ひとが好きですから。』と瑠る璃り子こは美び人じん畫がわの方ほうを取とり胸むねの先さきでちよいくと動うごかしながら櫻ちやう子じのお腹なはらの邊あたりに眼めを配くわつて居ゐる。顔かほは少すこし瘡やせたが、メリンスの中ちゆう形がたの裕ゆ衣いを着かて單ひとへ衣おび帯おびを緩ゆるく廻まはして居ゐる腹はらの膨ふくらみが柔やわらかな圓まるみを帯おびた微かすかな輪りん廓くわくだけでも解わかる。

『あゝ大だい分ぶん大おほきくなつた。』と瑠る璃り子こは胸むねの中うちに思おもつた、そして霎しはら時とき何なんとも言いへぬ厭いやな氣き持もちで居ゐつた。

『何どこ處こかへ避ひ暑しよに行ゆきませうか。』と櫻ちやう子じが言いふ。

『えい何どこ卒そつ。』

「悪う答へたが其れは何となく氣乗のせぬ聲であつたと自分で氣が付いたので『是非ね。』と  
 ひ直す。が其れも亦た木に竹を接いだ様な挨拶だつたので急に改まつて『行きませうね、是非  
 お伴したいわ、大磯？ 箱根？ 一つそ輕井澤の方が可いでせう。』  
 悪う言て彼女は輕井澤の風景を精しく述べ立てたが、彼女の眼はいくら見まいとしても櫻子  
 の腹の邊りに向くのであつた。といつの間にか言葉の方がお留守になつてしまふ。  
 悪ういふ奇妙な状態は一時間も續いた、そして瑠璃子は自分ながら遂ひ出される様な氣持で  
 此の家を出た。

「話らなかつたね、少し煩さ過るよ。」と寛は櫻子と二人きりになつた時に言つた。

「でもね、御親切なんですわ。」

「親切も難有迷惑だ。」

寛は母の言葉を思ひ出した。其の翌日も瑠璃子が訪ねて來た。

「私昨夜ね、餘程どうかして居ましたのよ、音樂會のごだくに氣が取られて居たもんだから。」  
 と彼女は幾度もなく昨夜の申譯をするのであつた、其日は正午頃から夕方まで遊んで、久子に

も百合子にも快活に話しかけ而して寛と櫻子にありたけの努力を以て愉快に仕向けた。彼女は  
 滑稽な愛蘭の俗論も唄つた、露西亞のボルカ踊の眞似もして見せた、そして皆を笑はせた。  
 で最後に、

「今日は失敗らない中に歸るわ。」と高笑ひしてさつ／＼と引揚けた。

「こんなに親切にされては全くやりきれない。」と寛は腹立たしく言つた。

「でも悪意ぢやないのですから。」

「悪意でなくても、これでは吾れ／＼二人きりの生活が無くなる、誰あれも居ない處で二人つ  
 きりで一日でも可いから暮らして見たい。」

「旅行をしてお出なさい、櫻子さんの身體に障らない様に、近い處へな。」と母の久子が笑つて  
 言つた。

「私も行きたいわ。」と百合子が言つた。

「貴方は不可せんよ、旦那様が出来ましたら伴れて行てお貰ひなさい。」と久子が言つた。  
 「ぢや私一生旅行は出来ませんのね。」と百合子も笑つた。



「行かうく。」と寛は勇んだ。

「瑠璃さんには黙つてる方が可いよ。」と久子は言た。

妙義は尖がつて榛名は歪んで居る、浅間の煙は丁度眼と平行の處に見える。輕井澤の高原に夕日の色が濛へば月見草は早苔を破りかけて鈴蘭の花は黄に白に涼しい緑の間に揺れ出すと、野球や庭球の人達はそろく歸り仕度に就く、洋館や別荘建、恰らに外人街の如く整頓した此の山間の別天地に、夕べを祈る讚美歌の聲、ピアノの響が、そこ此處に起り、腕を組んで散歩する洋人の幾組が楽しさうに見え出す。

「まあ可愛い花、まあ何といふ花でせう。」

櫻子は純白な服の裾長く、後ろに袂を取ては路傍の花を手折ては束ね、束ねては手折る。

「それは皆な雑草だよ。」と寛は子供を作れてお寺詣りに行くお婆さんの格で、櫻子の花を摘むのを待ちながら言ふ。

「雑草でも可いのよ、私可愛いんですもの、皆んな可愛いんですもの。」

「貴方は詩人だ。」

「あら雨ぢやないけれども、ウオゾオースの詩には一本々々の花の呼吸が靈の底に浸み込むと言た風のが澤山ありますわね。」

「自然の詩人、愛の詩人、僕はウオゾオースが好きだ。」

「私もよ、大好よ。」

「さあく、歩かう、詩人は花を折るものぢやないよ。」

櫻子は大きな聲で笑つて寛の腕に凭れ、四邊を見廻した。

「どうしたの？」

「だつてね、日本では腕を組んぢや不可いでせう。」

「貴方は外國人に見えるから誰も何とも言はないよ、外國人ならどんな事をしてても可いと思つてる、その癖外國人を排斥する、そこが日本式だね。」

「でも日本は可い國ですわ。」

「なぜ？」

「貴方の生れた國ですもの。」

『愛の詩人は巧い事を言ふ。』

寛は櫻子の腕をしつかりと引寄せながら眼を見詰めた、櫻子も見詰めた、二人は微笑したまままほつとした様に眼を夕日の方へ向けた。沈々として落日は紅い雲の中に沈み行く、紅い雲の末が次ぎ／＼に薄らいで、紺青の天に紛れ込む。何處ともなく讚美歌が流れて来る如何にも平和な夏の夕べである。櫻子は立て首を低れた、そして靜かに祈禱した。寛は黙つてその終るのを待て居た。而して落日の光の下、高原の花咲く徑に立て祈禱を捧げて居る我妻をミレーの畫よりも美しくと眺めた。

『何を祈つてゐるのだらう、二人の愛の永遠の歡喜？ それから腹の中の胎兒の祝福！』  
 慙う思ふと寛も祈らずには居られない様な氣がした。

『美しく優しい妻が、これから母となるべき準備をして居るのだ、此の可愛い若い娘が私のために母となるのだ、其の頭の中には良人に對する愛の炎が燃え、其柔しき鳩の様な乳の底には子に對する愛の泉が滴り、そしてこれから造るべき新らしき家庭の責任を感じて居るのだ。』  
 寛の眼には涙が一ぱいになつた。彼はそれを振拂はうともせず濡れた眼で妻を見やつた。

櫻子の眼にも涙が滴つて居た。

『あゝ／＼私ね、私ね。』と櫻子は狂的に寛の首を抱いた、『何といふ幸福なんでせう、あゝ私ね。』  
 小さな路に二人の足取が亂れた、二人は堅く身を寄せたまゝ、よろ／＼と歩き出した、熱い唇、熱い頬、熱い眼、愛の炎の中に二人の魂は坩堝に投れた鉛の如く溶けた。

紅い日は沈んだが天は未だ明るい、二人は何時までも離れずに歩いた。と櫻子は町への入口で背後を向いて聲を擧げた。

『あら瑠璃子さん。』

『おう。』

『先刻から私達の後から誰かゞ來ると思つて居ましたわ。』  
 二人は立停つて瑠璃子を待た。

『とう／＼目付かつた。』と瑠璃子は洋傘を疊んで腹を抱へる様に笑ひながら足を急せて來た。  
 『私達こそ貴方に無斷でやつて來ましたわ。』と櫻子は顔を赧めて言た。

『いえ／＼私もお邪魔する氣ではなかつたけれども、お祖父さまが來てるもんですから。』

「あら爾？」

「お宿は？」

「ホテルよ。」

「後で伺ひますわ。」

寛は横を向いた。

昔から今日まで結婚政略といふものがある。其れは結婚を以て情實的な結託を造り、自己の勢力を増さうといふ考から出たもので、羅馬の英雄達にも其例が乏しくないが、支那や日本には頗る多い。

織田信長や徳川家康は好んで此の政略を用ひた、此の場合には婦人は一種の賄賂物品に過ぎない、更らに一面から言ふと、我が娘や息子を富豪に配する事が今日流行しつゝある、其れは我が子を餌にして鯛を釣るに過ぎない。

此の政略を好んで用ひる人は椿侯爵であつた、彼が三十年間長州閥の權威者として明治の相國たるは善く婚姻の媒介をなし、其の子や孫を結婚に利用した事が與つて力あるのだと噂され

て居る。

侯爵の孫娘瑠璃子と男爵麻生寛とは幼少からの許婚であつた、其れは寛の父が存生の時に結ばれた約束で、父は當時外交家として又た椿侯爵の股肱として朝野に推されて居た。が彼が死亡後此の契約が破棄せられて、瑠璃子は當時濠洲から移民問題を提げて歸朝した某法學士に變更された。別に愛して居るでもないが寛に取ては侮辱された様な氣がした。と法學士某は大風呂敷が破れて行方を晦ました時に、侯爵は又もや寛との約束を復舊した。

が其の後、當時三十歳にして大藏省の參事官となつた俊才があつた、其れは百萬の富を有する富豪の次男であつた、彼は瑠璃子と結婚して侯爵を擡にしやうと企てた。で侯爵は「彼の男は才氣もあり金もある、將來は我が黨の片腕になる男だ、あれの處へ行け。」

「御祖父さんは私を品物の様に思つて被居る。」

涙に袖は朽ちれども權勢比なき祖父には反抗すべくもない。彼女は承諾した。寛は當時僅かに二十一歳、空想と憧憬と、好奇心に満ちた青年は美しくしき瑠璃子を見るにつ

け我が妻よといふ叫びが胸の中に溢れた。二人は公然と交際して居た、世間では既に卑しい噂まで傳へられた、と間もなく其れが夢の如く掻き消される、侯爵の都合に依て右に左に動かされる。

「人を馬馬にしてる、あんな娘を誰が貰ふものか。」

彼が自暴になつて酒を飲み歩いたのは此の時であつた。

が例の参事官は翌くる年有名な收賄事件で入獄した。

「やつぱり寛の方が無事で可い。」

侯爵は三度び寛の方へ逆戻りした。が此の時寛の瑠璃子に對する熱は全然冷却してゐた。

「あんな女は藝者にも女優にも澤山ある。」

彼は恚う冷笑した、それと反對に瑠璃子の熱度が非常な勢を以て加はつた。彼女は最早や

二十五歳である、いつまで祖父の玩具になつて居らるべきものでないといふ自覺は、一日も早

く寛を捕へやうと云ふ勇氣を起さした。

女の盛りの年を祖父の政略のために徒らに過した瑠璃子は亦た氣の毒な身の上である。

政略にばかり重きを置いた侯爵も、流石に此に氣が付いた、自分のために大切な婚期を失つたかと思へば、十餘人もある孫の中で瑠璃子ばかりが特に可哀さうになつて来る。

「今度は變更なしだよ。」と彼はくれぐれも瑠璃子に言た。

「でも寛さんの方で什麼ですか……」

「どうも恚うもないよ、私の命令でやつて見せる。」

「それだからお祖父さまは解らない人なんですわ。」と瑠璃子は泣いた。

軍事と政治、門閥、名譽、權勢、それ等を無上のものに思ひなして居る此老人に、人間の細

かな感情が解り得やうか。但しは……???

瑠璃子は睦まじく腕を組んで行く二人の姿を茫然と見送つた。何とも言へぬ反感がむらく

と起つた。

「夫婦になつてしまへば恩も義理も忘れてしまふ。」

彼女は恚う投げる様に言た。

「何もあんな男は欲しくはないんだが、あんなり人を踏み付けにすると取返してやりたくなる

わ。」

突然の獨語に過ぎなかつたが彼女は此時自分の心持が何時の間にか變つたのに氣が付いた。「私があの人達を聞く纏めたんだから私を神様の様に難有がらなければならぬんだ、其れに今となつて私を邪魔ものにするなら、私にも考がある、私は毀して見せる、そしてあの男を私のものにして見せる。」

自尊心の強い人は如何なる場合にも自分を中心とし、自分を人に認めさせずには置かない、寛と櫻子を夫婦にした時には彼女とても心持が快くはなかつたが、併し二人に恩恵を施した自尊心の満足が彼女を慰めた、而して一方に彼女は自分を小説や芝居の主人公の様に見做して微笑した。

遊戯的な戀、祖父のために幾度も挫かれた戀を諦める事は彼女に取て左までの苦痛でなかつた。

「譲つてやつたのだ、寛さまを譲つてやつたのだ、元とく私の所有を譲つてやつたのだ。」此の考が最も深く彼女の胸に潜んで居る、譲つてやつたのだから感謝するが當然である、

それに二人は感謝しなくなつた。

「だから私は私の力を示すために二人を引裂いて見せる。」

彼女の心の轉々した徑路は是れである、彼女は如何にして此大芝居を演じやうかと考へた。

「なめにあんな男を擒にする位は何でもない事だ。」

彼女は微笑を浮べて洋傘をくると廻した、而して別荘の方へ足を向けた。

寛と櫻子は快く疲れて宿に歸つた。夕飯を済ましてから二人は寢椅子の上に並んで腰を掛け、窓に向つて唄ひ出した。とボーイが手紙を持って来る。

「一寸用談有之候故即刻此の使と共に御出下さるべく候、椿。」

「何だらう。」

「候爵からの御使なのです、では行ていらつしやい。」

「では直ぐ歸つて来るからね、貴方は淋しからうな、折角保養に來ても何にもなりやしない。」

慥う呟やきながら寛は即ぐ帽子を取た。

「行ていらつしやい。」と櫻子は微笑して良人を見送つた。

侯爵の別荘は坂の上にある、土塀の内部には鬱鬱たる樹木が並んで、その隙から洋館の屋根が月に光つて見える、寛は使ひの爺と共に門を入つた。

「此方へ。」と爺は立關の横を過ぎて植込の間を潜り入た。

「何處だ。」

「へえ、此方で。」

庭先へ出る戸口の石段に爺は立停まつた。

「こんな處から入るのか。」

「へえ、お客が立て込んで居ますで。」

靴を脱いで廊下を通る突き當りの十疊許りの室に特に涼しく伊豫簾が掛けてあつて、中に電燈が眩ゆく點り、向ふの泉水が水を吹き上げて岩に碎けるのが透いて見える。

「しばらくお待ち下さい。」

眼も覺むる許りな水色の敷物の上に籐の椅子が五六脚、縁側に同じく籐の長椅子、そこに水

團扇が一つ載せてある。

「あゝ涼しさうだ。」

寛は怨う言て庭を眺めた。

老侯爵は中々出て来ない、十分二十分、三十分を経てども出て来ない。彼は櫻子がどんなに待てるだらうかと考へたので、腹の中が苛立たしくなつて来た。

「人を馬鹿にしてる、歸らう。」

彼は廊下へ飛出した。

「あら誰あれ？ 覗いて居るのは。」

廊下の突き當りに雪の如く白い帷を透して華やかな灯の下に半裸體の女が見える。女は帷を片手に舉げて此方を見た。

「あら、寛さま？ まあ私どうしやう。」

慌て、肌を入れて細帯をくるくゝ巻にして鏡の前に櫛を棄て、  
「私今お湯から出た許りなのよ、御免なさい。」

羅の紺地は浴後の水々しい肌色をくつきりと引立たせた。

「私吃驚しましたわ、誰かと思つて、まあ能くいらして下さつたのね。」

「老候は？」と寛はぶつきら棒に言つた。

「多分留守でせう？」

「留守？ ちや失敬します。」

「まあよろしいぢやございせんか。」と瑠璃子は先に立て化粧室を出た、而して長椅子に腰を掛けた。

「僕は爾して居られませんか。」と寛が言ふ。

「奥様の事がお氣になつて？」

「無論です。」

「あら随分露骨だわね。」

「僕は歸ります。」

「一寸待て頂戴ね、私貴方にお話したい事があるのよ。」

「簡単に願ひませう。」

と寛は半ば立ちかけて帽子を被つた。

「そんなに急がなくても可いぢやないの？」

「お話といふのは？」

「あら、ゆつくりお話しませうよ、帽子を脱てね。」

瑠璃子は寛の肩に凭れる様にして帽子を脱がせながら「話が濟まない中は返さない事よ。」

寛は不思議に思つた、今まで自分の邸へ訪ねて來た時は温雅でやさしくて猥らな舉動は些んもなかつたが、今夜の狎れくしさは何といふ事だらう。

「話といふのは何ですか。」

「貴方のために極めて重大な話よ。」

「といふのは？」

「ねえ貴方。」と瑠璃子は寛の手を引いて強て自分の傍に掛けさせ、其の手をその儘に寛の指を弄りながら、

「貴方は櫻子さんをお本當に愛してゐらして？」

「爾です。」

「結構ですわ、私も本當に満足よ、貴方は私かどんなに貴方と櫻子さんとの事件を圓滿にしやうかと骨折つた事は御存知でせうね。」

「その點は實に感謝して居ますよ。」

「嬉しいわ。」と彼女は無意識の如く寛の手を自分の唇に當てやうとした。寛は慌て、手を引いた。

「あ、私、気が付かずに失禮しましたわ。」と瑠璃子は羞を含んで俯向きながら上目にちらりと寛の顔を覗く。

「で、お話は？」

「あ、爾でしたね、ですが寛さま、私が何故貴方方の事に骨を折たのでせう。」

「貴方の厚意は櫻子も決して忘れないと言って居ます。」

「いゝえ、なぜでせう。」

「さあ。」

「考へて下さらなかつたの？ あ、私は貴方がそんなに冷酷な方だとは思はなかつた。」

「冷酷？」

「えい、貴方を愛して居ればこそ貴方の幸福のために犠牲になつたのだと思つて下さらないの？」

「瑠璃子さん。」と寛は咎める様に言つた、「貴方はなぜそんな事を言ふのです。」

「あら知てる癖に、ねえ寛さま、貴方と私の事は幼さい時からいろく波瀾がありましたね。」

「もうそんなお話は御免蒙りませう。」

「寛は起ち上つた。そして縁を歩き出した。」

「あら帽子！」

「あゝ。」と寛は立戻る。

「ではね、此の帽子をお返しするから、もう少し私の話を聞いて頂戴ね。」

「何ですか。」



「そんなに冷たい態度をお取りにならなくても可いぢやないの？ 貴方に冷遇されて私は生きてる故がないわ、昔はお互ひに熱い言葉を交した間柄ぢやありませんか、其れを今ま掌を返す様に……ねえ寛さま、二十五の今日まで何處へも行かずに暮らして居た一人の女の事をお忘れなのですか。」

「それは止むを得ません。」と寛はふいと帽子を奪つて「瑠璃子さんお互ひに悪い國に生れて来たのです、貴方の事を思へば同情に堪へませんが、愛と同情は異ひますからね。」

「では私どうしたら可いの？」

瑠璃子は涙聲で言た。

「仕方がありませんな。」

「私、もう荒むわ、えい荒みますわ。」

「そんな事を。」と寛は慰さめる様に肩に手を置き「僕のために荒むなんて……」

「いゝえ、荒みますわ、私、どんな事をするか知れやしない。」

「困りますなあ。」

「ですから私どんな男でも片端から墮落さして見せる。」

「どうすれば可いんです。」

「あら……」

瑠璃子は起つて寛の胸に顔を埋めやうとした、寛は驚いて退つた、瑠璃子はばたりと椅子に倒れた。

「左様なら。」

寛は逃げる様に其處を出た。

「くやしいツ。」と瑠璃子は椅子に縋つて唇を噛んだ。「昔は随分熱烈に私に迫つた癖に、今まは全然他人の様になつて居る、私の恩も忘れて義理も忘れて……」

彼女は起き上つて椅子に凭れた自分の姿を見た時に、何とも言へぬ憤怒がむらくと湧いた。

「復讐！」

彼女の胸には愛もなくなつた、戀もなくなつた、只だどうかして此の胸が清々する様な事をしてやりたいといふ念が充満であつた。

「どうしても私の存在を認めないといふなら認めさせてやる、右に向く頭を左に振り曲けてやる、そして私の所有にして見せる、さうしなければ私は永久に劣敗者になるのだ、爾だ、どうせ憊うなつたら最後まで戦ふばかりだ。」

彼女は此の時庭石傳ひに来る老祖父の下駄の音を聞いた。で彼女は急に元との様に椅子に突伏した。

「おう誰も居ないかと思つたら、瑠璃さんか。」

老侯爵は此の暑さにも薩摩の木綿緋を着て裾短かに昔の武士氣質を見せて居る。

「瑠璃さん、好い月夜だぞ、見て見い、峨眉山月半輪の秋といふ奴ぢや。」

瑠璃子は答へなかつた。

「どうぢや、輕井澤は涼しいのう、秋の様だぞ、月似秋か……うむ月夜に似たり、いや平仄が合はん、月如水ぢや、爾だ月水の如し、輕井澤月水の如しは不可、溪山月如水、あゝ不可、溪間の水に澄める月かも、歌の方が可い、どうぢや。」

「そんなもの知りませんわ。」と瑠璃子は顔も舉げずに言た。

「どうした、ふうむ、御機嫌が悪いな。」と老侯は無頓着に笑つて「月下樹に倚る女、不可ん竹枝になるわい。」

「知らない、知らない。」

憊う肩を揺つて瑠璃子は聲を立て、泣いた。

「どうした。」と老侯は音ならぬ孫娘の態度に驚いて椽に上つた。

「抛つて置いて頂戴、私泣きたいんですから。」

「何が悲しくて泣くのぢや。」

「御祖父さまのお蔭で私こんなになつたのよ、あゝ私死んでしまひたい。」

「どうしたといふのぢや、瑠璃さん、言て見い、うむ？」

「言つたつて仕様がななんですもの、あゝ私死んでしまひたい。」

老侯は凝と瑠璃子の背中を見詰めた、ふさくとした髪は顫へて、袂を顔に當て、居る姿は又となく哀れである。

「私にだけ言てくれ、な、御祖父さまにだけな。」

「私ね、御祖父様。」と瑠璃子は涙を収めて敷物の上に坐つた。

「さあ椅子に掛けるが可い。」

「いええ。」と瑠璃子は其儘に坐り直して「私ね耻を搔かされましたのよ。」

「誰に？」

「寛さまに。」

「うむ。」と老候は椅子に掛けた身體を前屈みに耳を傾ける。瑠璃子は寛と櫻子の一件を詳細に語つた。老候は飛上る様に驚いた。

「そんな事があつたら何故私に知らせなかつたか。」

「でも御祖父さまに御話すると私が嫉妬深い様に思はれますもの。」

「馬鹿な、天下の一大事ぢや、眞木も眞木ぢや私に祕密にそんな事を……不埒な奴ぢや。」

「でも私が、御祖父さまが御承知をなすつたと言ひましたから。」

「それは不可ん、お前も軽率ぢや。」

「でも、結婚披露までには間がありますからそれまでに私は……」

「櫻子を妾にしてお前は本妻にならうといふ氣ぢやつたのか。」

「それまでは考へませんけれども……寛さまだつて私と約束があるんですから。」

「無論だ、約束は結婚と同じだ、二重結婚ぢや。」

「侯爵は恚う言て霎時考へ込み、

「お前は寛と何か深い關係を結びやしまいね。」

「いええ。」と答へやうとしたが瑠璃子の頭に急に閃めいたものがあつた。彼女は黙つた。

「あつたのか。」

「あつたんだね。」

「はい。」と瑠璃子は耻かしさうに袂で顔を掩ふた。

「可し、過失は悪い事だが、それを棄てる寛は無責任ぢや。」と老候は唸つた。

……  
 櫻子の  
 嫁に  
 なる  
 こと  
 は  
 出来  
 ない  
 こと  
 だ  
 ね  
 ……

七

平和は何時までも續いた。暑中休暇が終ると百合子は機嫌よく學校へ通ふ、櫻子は重に姑の久子と共に日本料理や裁縫の稽古をする。櫻子の植ゑた庭の秋草は一樣に咲き揃ふた、スターフロックスやチュリツプやカンナや葉鶏頭や野菊、枯梗、ダリヤなど花壇に満ちた、西洋の草花の名は覺えにくいので幾度教はつても久子は忘れるので三人に笑はれる、其の花の朝露に濡れたのを櫻子が剪刀で切り取で三つの束にする、一つは神棚へ上げるので、一つは良人の床の間のにし、今ま一つは百合子が學校へ持て行くのであつた。

「怒ういふ子供じみた日課も平和な家庭には可なり大きな喜びであつた。」

従つて百合子の快活な悪戯も益々激しくなつた、外國の娘は身體が長けても心持は無邪氣である、今までの眞木家に八方から睨まれて居る窮屈な家庭と異つて、佛様の様な久子と優しき姉夫婦の自由な園に放たれた彼女は其の天真のお轉變を發揮せずには居られなかつた。

時には厭がる老母を鞆に載せて、ぐんぐん揺り上げる、久子は肝を潰して「まあ此の子はまあ〜。」と聲を擧げる。其れを見て一同は笑ふ。

「怒ういふ調子で久子も何時の間にかテニスの相手までする様になつた。」

「此の子のお蔭で私は段々ハイカラになります。」と久子が言ふ。

「ベースボールも教へてあげますわ。」と百合子が言ふ。

笑ひ聲は毎も絶えない。此の平和な月日の下に寛はつくく幸福を感じると共に、自分が徒らに遊んで暮らすべきでない、何か立派な仕事をして見たいといふ氣がむら〜と湧いた。これまで彼は何をして無意味で空虚で根氣が續かない、そして年百年中只だ苛々した氣持であつた。

結婚してから不思議に氣が落付いた、愛の満足！ 其れが彼の暗い生活を光明に一變した。

「ねえ櫻子さん。」と彼は言た。「僕等は僕等の愛の記念として何か立派な仕事をしやうと思ふが何が可いだらう。」

「大變に結構ですわ。」と櫻子は微笑した眼を向けて「私達は怒ういふ異つた人種でいろ〜苦

「勞もしたのですから、どうか世界中の人種が本當の兄弟の様に成れる様にしたかと思ますわ。」  
 「立派な考だ。」と寛は言た、實は彼自身も其の事に就て苦心して居るのである。

「何しろこれは二十世紀の大問題だからね、僕等が一生の仕事として骨を折りたいものだ。」  
 漠然たる此の閑談は日を経るに従つて熾烈に寛の胸に炎を増した。で彼は先づ其の準備として古來の書籍に依て研究する事とした。

人種の區別を撤廢する事は果して出來得る事であらうか。希臘、伊太利、佛蘭西、同じ人種でありながら争鬪がある、東洋と西洋、同じ黄色の中にも支那と日本とは親しめない、ざつと考へても至難の業である。古來の歴史、放牧時代からの變遷、政治組織、經濟上の利害關係、習慣の格力、教育法、宗教の差異、人種以外の反感が人種區別に食ひ込んで居る點が深い根柢をなして居る。

こんな事は寛が今更驚くべき事ではない、併し彼は今愛の生活に入つて居る、彼の心に燃ゆる愛は彼の眼に觸る、凡てのものに注がれて居る、あらゆるものを愛したい、あらゆるものに感謝したい、そして此の世界を自分達の生活の如く愛の樂園にしたい、慙ういふ氣が彼の胸に

頭に張り詰めて居る、彼は此の愛の歡び、大慈大悲の光を自分達二人で占領するに忍びなかつた。

で彼はゆつたりとした氣持で其の方針を樹てた。

一方に寛と櫻子が大きな愛の問題に就て考へつゝある間に久子は竊かに心を痛めた。

「戸籍だけを早く済ましたい。」

久子は櫻子の段々膨れゆく腹を見るに付けて先づ考へるのは是である。

「縦令混血兒の腹に宿つた子にしろ、私から見ると本當の孫だ、一人の初孫だ、其れが生れるといふのに未だ戸籍が決まらん様では。」

彼女は折り／＼其の事を二人に言ふのであつた。

「それはねえ御母様。」と櫻子は笑ひながら言ふ「戸籍はあつてもなくても神様は戸籍表以上に私達を認めて下さいますわ。」

「併し國法は國法だから、なるべく早く入籍する方が可からう 僕は目白へ行つて談判して來るから。」と寛が言ふ。

自由の天地に育つた櫻子は、戸籍や形式よりも、二人の愛の聯結を信ずる事に於て夫婦の意義が神聖であるのだと思ふて居る、彼女の眼中には精神的の愛以外に何物もなかつた。だが愛の目的はお互に自分の所有であるといふ信念を確實にする事にある、此の點に於て縱令形式にしる、戸籍上の夫婦であるといふ事は一層夫婦の實質が確であると寛も久子も思ふのであつた。無論櫻子も其れを不必要とは決して言はなかつた。

『ではねお母さん、行つて來ますよ。』

極めて不思議な習慣、特に日本の上流社會に多くある煩瑣な習慣は、何の因縁もなく何の權利もない人間が、他人の家庭の内部に立入る事である、親類や後見人は未だしもの事、椿侯爵の如きは眞木男爵や麻生寛の父の友人であつたといふだけなのだ、兩家とも侯爵の一諾がなくては何事も出来ぬ様になつて居る。寛が折に觸れて反抗したくなるのは是であつた。一二時間経つと寛は歸つて來る。

『どうお言ひだつた。』と久子が胸を轟かしながら訊く。

『承知した、何れ會議を開いて確定すると言つて居ました。』

『別に機嫌が悪い事もなかつたか、頃日は瑠璃さんもふつつり見えないからな。』

『大丈夫です、侯爵だつて僕の結婚にまで干渉する權利がありませんからな。』

一月は過ぎた、侯爵から何の通知もない、そこで寛は再び行つた。

『まだ決まらんのか。』と久子が心配さうに寛の歸りを待ち受けて言ふ。

『會議は決まつたが、華族の結婚は手續がむづかしいとかで……』

『では手續を下さる事になりましたのかへ。』

『さうらしいです。』

『まあ、それで私も安心しましたよ。』

又た一月は経た、何の通知もない、寛は三たび侯爵を訪ねた、と間もなく歸つて來た。

『お母さん、僕は朝鮮へ行かなきやなりませんよ。』

『どうして……』

『今ま辭令が出たのです、韓國視察を命ぜられました。』

『お前は行くつもりかへ。』

久子は凝と眼を据ゑて言った。

「行きます、僕も調べて来たい事が非常に多いんですから。」

「併しね寛さん。」

御上の御用に立つのは華族の本分だ、どんな御用でも盡さねばならぬと平素言て居る母が何となく躊躇して居るのを見て寛は不思議に思つた。

「どうなすつたのですお母さん。」

「いえ御用ですから行かなきやなりませんけれども……候爵がさう言ひましたのかへ。」

「さうです。」

「どんな機嫌で？」

「にこ／＼して居ました。」

「戸籍の事は？」

「留守中にちやんとして置くつて。」

「私が行て来ませう。」と久子は突然言た、「これは當事ぢやない、私が候爵に會つて来ませう。」

「寒時寒殺熱時熱殺。」

竹筆で捺すつた禪僧の走り書に、一輪の黄菊、縷々たる香煙が茶室を繞つて窓外さら／＼と鳴る竹林の中へ靡きゆく。真中に薬の圓座一枚、そこに椿候爵は跣坐して居る、兩手を臍下に拱んで半眼に開いた眼、きつと結んだ眼、寂寞として行ひ澄まして居る。

彼は何事を考へて居たであらうか、山の松風、峰の月、無念無想の境地に沈みつゝあるか、但しは胸中に描く乾坤一擲の計畫であるか。

何より恐ろしいは目白御殿の茶室であると政界に唄はれて居る、任免黜陟は無論の事、極めて瑣末な一家の秘事に至るまで、此の茶室から迅雷の如く天降る號令には何人も反抗する事は出来ない。

今ま彼の身邊に迫つて居る問題は日英同盟の問題、朝鮮に於ける水源虐殺問題、〇〇省收賄問題、内閣更迭問題、これが重なるものである。彼は今ま其れを考へつゝあるか。

竹を吹く風は雨の如く窓外に響く、秋も更けゆく冬空に凍ついた様な白い雲が枯色深い枝の上を流れてゆく、香爐の煙は眞直に騰つてそれから左右左に揺れる。

羅漢の様に瘠せた皺深い顔は益々深さを増すと唇は益々堅く結ばれる。と彼はばつと眼を開いた。彼の胸中何ものか決められたのである。彼は撞木を取て磔板を打つ。

立矢の字の女中が靜かに襖を開いて畏まつた。

「榎崎を呼べ。」

「はい。」  
 聽て榎崎岩介が現はれた。榎崎岩介といふのは彼の腰巾着で、軍人上りだけに粗衣粗食を以て甘んじて居る、彼は日清戦争には一軍曹であつて、日露戦争には大尉として出征し其の左足を射たれた、其れから専ら侯爵の帷幄に參して居る、侯爵の前で足を投げ出して居るものは恐らくは彼れ一人であらう、开は義足の故ばかりではない、侯爵に對つて直言するのも彼であれば侯爵の陰謀の手足となるのも彼である。

「御用でしたか閣下。」

「うむ、相談がある。」

侯爵は木彫の様な顔であるが、憂ある時には右の頬の顴骨の下の皮がびりびりと動く、喜び

ある時は此の皮は伸びやかに笑みを含んで居る、榎崎は其れを識て居る。

「うむ何か大事件だな。」と彼は思つた。大事件の時になまじな口を出すと逆鱗に觸れる、で彼は凝といかにも軍人らしく侯爵の顔を見上げた。

「眞木の混血兒の事ぢやが。」と侯爵は言た。

「はあ。」

「あれは廢生の悴と同棲しとるぢやが。」

「はあ。」

「公然の夫婦ぢやないのだ、併し櫻子は最早七月を経過しとる、腹が大きいのぢや。」

「はあ。」

「其れを什麼處置するが可いと思ふか。」

「なる程。」

尊大で我執の強い人に相談を受ける程迷惑な事はない、反對すれば「馬鹿ッ。」と怒鳴られる、憤成すれば無能に見られる。榎崎は首を傾けた。其れは侯爵に言ふだけ言はしてからの事だと



思つたので、

「閣下の御意見は？」

「それが相談ぢや、先づ貴公の意見を聞かう。」

「私には考がありません。」と檜崎は決然と答へた。「此の問題には日本の國體論と人道論が混合して居ると思ひます。」

「いかにも爾ぢや。」

「此の混合した點を判断するのが先決問題だと思ひます。」

「其れで？」

「其れだけの事で、他に考は……」

「ないと言ふのか。」

「はッ。」

侯爵はやくくと笑つた、總じて己れを賢しとする人は、己れより劣れるものを遊戯的に翻弄する癖があるものだ、檜崎に相談するといふも實は檜崎に命令するに過ぎなかつたのである。

「私は此の結婚に反対ぢや。」

「はッ。」

「華族は皇室の藩屏ぢや、衆庶の模範ぢや、華族の血統は純粹でなければならん、若し華族が外國人を妻とする時は、其の子孫は日本三千年來の愛國の血が濁つて來るのぢや、さうすると一旦事ある場合に國體の擁護をする力がなくなる。」

「いかにも……はッ。」

「だから私は反対ぢや。」

「併し麻生男爵が既に櫻子さまと同居して其の胤を宿さしたとなりますと。」

「一混血兒のために國體を損する事は斷じて出來まい、どうぢや。」

「御尤で……はッ。」

「私の言ふ處に無理があるか、輕薄な今の奴等は其れを没人道と言ふかも知らん、人道とは人情ぢや、私情を以て公義を棄る事が出来るか。」

「はッ、併し眞木男爵は何と仰せられますか。」

「眞木は櫻子の父ぢやが、元來眞木そのものが外人と通じて混血兒を生じたのが不埒千萬ぢや、眞木は自分の罪の贖ひとしても此の娘を犠牲にする義務がある。」

「併し何と申しましても親子の愛ほど深いものはありますまい、眞木男爵が快く櫻子さまを犠牲になさるでせうか。」

「せんでもさして見せる。」

「併し男爵と言ひ麻生男爵と言ひ、華族間に勢力があるのですから若し閣下に叛旗を翻す様な事がありますと。」

「うむ。」

「御承知の如く長州系の者が段々に滅つて参ります、此の場合二人の男爵を失ふ事は何よりの損害でございます。」

「貴公はさう思ふか。」

「はッ。」

「私もさう思つとる。」

「では？」

「榎崎は果して老侯の胸中に何等かの策戦が決められてあるのだと覺つた。」

「二人の氣に障らぬ様に始末をするには。」

「はッ。」

「祕密に決行する事だ。」

「はッ。」

「何ものか壓へる様な息吹が迫つた。」

「麻生の悴は朝鮮へやる事にした。」

「なるほど……併し……」

「わかつとるく、貴公の言はんとする處を言て見やうか、麻生は遂ひやつても櫻子と其の胎兒をどうしやうといふのぢらう。」

「いかにも御意の通りです。」

「榎崎！」と老侯は聲を更めて言ひかけたが、此時窓外の竹の嵐に耳を澄ます様に顔を反向け

「榑崎、病院があるまいか、適當な病院が。」

「はッ、病院はいくらもありませんが。」

「普通の病院でなく特別の病院ぢや。」

「老侯は恚う言て一摘みの香を香爐に燻べる。煙は徐かに騰つた。」

「祕密な病院……永久に取扱つてくれる病院でなければなりません。」

「榑崎は侯爵の顔を讀む様に見上げた。」

「さうぢや、狂癪病院が至當かも知れん。」

「承知しました。」榑崎は言た「國體のためには致し方ありますまい。」

「無論ぢや、國體のためには一個人を殺さなきやならん事もある。」

「戦争も同じ意義です。」

「名言ぢやね。」

侯爵は恚う言て微笑した。

「前例は幾らもある、榑崎、お互ほど忠實に國家を憂ふるものが今日幾人あるであらうか。」

これが来るの？

下らない言を話してせ  
ごりらアメリカの隣はねのど

「御意の通りです。」

榑崎は無上の光榮を感じせるもの、如く眼を垂れて頭を下げる。

禪味清風の茶室でほんの五分間に決められた櫻子の一生は寔に安價なものであつた。軍國主義！ 武斷主義！ 國家のためにはあらゆるものを殺しても構はないといふカイゼル主義、其

れは日東の目白の老侯の主義であつた。

良人の寛を朝鮮に逐ひやつて留守中に櫻子を狂癪病院に幽閉する、此の立案は何處から出

たのであるか、言ふまでもなく軍國主義の賜である、老侯は其れを國粹保存上必要な事だと

自負して居る、華族の血統を保つ事は愛國忠義の眞髓だと信じて居る。彼は其れを眞木男爵に

強ひた、そしてロザリーとの仲を割て歸朝せしめた、十年の後には再び其れを眞木男爵の令嬢

に用ひやうとして居る。

國家のためには止むを得ぬ事であらうか、人種の混同は左ほどまで恐るべき事であらうか。

神ならぬ身の寛と櫻子は恚る陰謀が身にふりかゝらうと知る由もない。青い窓帷の下にミシ

ンを据ゑて櫻子は妊娠服を裾長に着た足を動かしながら、針の尖を見詰めては一心に手を運ん

で居る。

「そんなに根氣を詰めると不可せんよ。」

久子は寛の羽織や寝巻を両手に持て入りながら慥う言た。

「いゝえお母様、遊び半分ですよ。」

「でもねえお産前に眼を使ひ過ると産後に眼が悪くなりますから。」

「櫻子さんはねえお母さん。」と寛は床の上に開けてある靴を整理しながら言ふ。「自分の縫た襦衣を僕に着せたいんですよ。」

「おやまあ。」と久子は笑つた。が直ぐ其の眼には老の涙が滲み出す。

「感心にねえ、煦暖かい事でせうよ。」

「さうですとも、僕は襦衣を着るのでなくて櫻子さんの暖かい心を着るんですからな。」

「全くですよ。」と久子は益々感心する。

「でも随分長い間留守になるのかへ。」

「さうですな、三月位。」

「といふと正月が過ぎてからですね。」

「あゝ爾なりますね。」

「お産までにはね、歸る様にね、それだけはくれぐれも頼みますよ。」

「大丈夫ですよ、二月には是非歸ります。」

「もう大分大きくなりましたから。」

久子は慥う言て櫻子の方を見やつた、櫻子はさつと顔を染めてミシンの手を休めた。

「そんな事を言ふと櫻子さんは耻かしかりますよ。」と寛は笑つた。

「でも内輪同士だから構はないぢやないか、大分お腹が動くでせう？」

「えい。」と櫻子は眼に笑ひを見せて「折りくゝ吃驚する事がありますのよ。」

「では男ですね。」

「さうでせうか。」

妊娠中の樂みは胎兒が男か女かを考へて見るのも其の一つである。

「そんな事がわかるもんですか。」と寛が横槍を入れる。

「わかりますとも、お前が私のお腹に居た時には暴れてく仕方がなかつたんですよ。」  
 「だが生れてからは案外に温順くて親孝行なんですね。」  
 「さうでもないよ。」

一同は聲を合して笑つた。枯木の間から窓に落る日影はほかくと絨氈を温める、外はさらさらと冬の天が輝いて居る。

「さあ是れで書類が皆揃つた、何しろね今度は十分に調べて来るんだよ、朝鮮の獨立問題！  
 其れが個人と國家の關係を研究するに絶好の材料なんだからね。」

「充分に調べて被來しやい。」と櫻子は勵ます様に言た、彼女は良入が精神を打ち込む様な仕事が出来たのを心から喜ぶのであつた。

愈々出發の前夜となつた。久子と櫻子と百合子の三人は寛を中心にして蕭やかに語つた、旅立の悲みは行く者の悲みでなく、留るもの、悲みでもない、行く者と留る者が互に、其の心中を察し合ふ事に依て悲みが一層深くなる。

久子は最も悲しかつた、老侯の處置は腑に落ちぬ點が數々ある、幾度訪問して眞意を叩いて

も只だ國家のためだ政府の御用だと許り答へる、其れさへ心配なのに産期近い櫻子を置いて遠く旅立つ我が子の心を察すると胸を痛めずには居られない。

悲しい顔を見せては濟まないと思ひながらも、どうかすると深い溜息が出るのであつた。櫻子はさういふ悲みは毫しもなく、彼女は只だ良人の身の上を氣遣つた、朝鮮は寒い、水が悪い、それに良人の性格として若いに任せて不養生をする、それや是れやの心配はあるが、良人の愛を信する者は、縱令何千里隔たらうと心は依然として平和である。

「いやですわねえ、お兄さまが居なくなると私淋しいわ。」

百合子だけが慥う言て皆を笑はせた。

「御土産を持って来るからね、待てお出、何が好いの？」

寛は自分の膝の上に百合子を載せて言ふ。

「綺麗な花が可いわ。」

「花は持って来る中に凋んでしまふぢやないか。」

「ちや、虎！」

虎の話が出たので久子は思ひ出した様に注意する。

「虎豹になんぞ行ては不可ませんよ。」

これで一同は又た笑つた。賑やかに睦まじく晩くまで語り合つて久子と百合子が母家へ歸つた後で寛と櫻子はいつまでも暖爐の前を去らなかつた。

「さあ一緒に掛けやう。」

二人は大椅子に並んで掛けた、暖爐はちろ／＼と燃えて二人の顔を照らす。

「もう三月ですね。」と櫻子は靜かに言た。

「あ、二月には歸るよ。」

「長いのね。」

「うむ。」

姑や妹の居る前では出た事のない淋しい吐息が出た。

「でもねえ櫻子さん、稀には離れる方が可いんだよ。」

「なぜ？」

「三月の後には又た新婚の様に活氣つくよ。」

「私は毎でも新婚の様ですわ。」

「あ、櫻子さん。」

寛は妻の手を我が膝の上に乗せて其れを厭へる様に力を締めながら、

「僕は幸福だ。」

「私もよ、貴方！」

櫻子の熱した顔が寛の胸に埋まつた、寛は其のさら／＼した髪の毛を指先で撫でながら小聲で言ふ。

「留子になると淋しいだらうな。」

「いゝえ。」と櫻子は首を掉た。

「どうして？」

「私はいつも貴方を思つて居ますもの、思ふ人がなければ淋しいでせうけれども。」  
「難有う。」と寛は胸が一ぱいになつて妻の頸に接吻した。

「思ふ人がなければ淋しい、實に善い事を言た。」

「私のお母さまも始終さう言て居ましたわ。」

「あゝ爾か、氣の毒な人だなあ。」

「お父様が日本へお歸りにならなければ、お母様はどんなに幸福だつたでせう。」

「さうだよ、歸らなければ可かつたんだよ。」

「でも侯爵の命令には従はなければならぬでせう。」

寛ははつと胸を打つた。だが其れは何の理由かは解らなかつた。

「僕は朝鮮へ行つても、決してお前と別れる様な事はないよ。」

「それは無論ですわ。」

櫻子は良人の胸から顔を離して笑つた。

「私達が別れるなんて、そんな……」

彼女は子供の様に聲を立て、笑ひ續けた。

翌くる朝は快晴であつた、晩秋の凡ての景色が輝いた、朝日はきら／＼と窓から室内に入る、

百舌が啼く、鶯が啼く、木といふ木は悉く濃い影を投げて枯芝にはらく／＼と陽炎が立つ。全然春の様なお天氣であつた。

櫻子は早くから起きて化粧に取り掛つた、良人の旅立を送るべく出来るだけ花やかに出来るだけ美しく化粧をしたい、そして今日だけはどんなに悲しくても泣顔を見せまいと心に誓つた。

寛は平素より快活な妻の素振を見るに付け、其の心根が一層いぢらしかつた。

「ねえ櫻子さん、身體を大切にしてくね。」

彼は靜かに怨う言た。

「えい大丈夫ですわ、お母さまも被居るから」

櫻子は玄關口で良人の手を握りながら怨う言た、而して良人の胸に一輪の薔薇を挿してやつた。

「では、左様なら。」

「身體が身體ですから停車場へは参りませんわ。」

「あゝ可いとも。」

「私が行くから可いわ。」と百合子が言った、我子が公用を帯びて旅立ちする時に母親たるものは決して見送つてはならない、子の勇氣を沮喪する愛がある、憐れいふ理由の下に母の久子も家に残つた。

百合子と寛を載せた自動車が進出した、櫻子は門の外まで見送つた、角を曲る時に寛は櫻子が両手を高く舉げて居るのをちらりと見た。

驚の如き爪が我が運命の上に掛りつゝあるとは知る由もない、櫻子は翌日良人の汽車中の葉書を受取つた。其の翌日は乗船の際に於ける葉書を受取つた。二つの葉書は天鷲絨の縁を取った梓の中に收めて卓子の上に飾つた。彼女は口課を定めた、今まで良人と話をする時間を冥想の時間に當てた。共に居る時は左までに無い事でも、遠く別れると其れが懐かしい想出の一つ一つになる、良人と共に歩いた庭、共に語つた窓、共に並んだ椅子、何れも其の人であるかの様に思はれる。

彼女は淋しさを慰めるために手細工を始めた、良人の寫真や繪葉書は美しく飾られた、嬰兒の産衣や帽子や靴下まで幾つもくゝ編んだ。而して留守中に良人の襦衣を編み上げべく取掛

つた。

淋しからうと言ふので百合子は毎晩泊りに来た、枕に就く前には二人並んで神様に祈る、極めて静かに平和な月日はすん／＼と過ぎ行く。其の年も暮れて櫻子も百合子も生れて初めて日本のお正月を迎へた。珍らしい事や滑稽な事を一々記してデビ一の許へ報告した。

夢の如く正月も過ぎた、二月になると一家は春を待つ如く寛の歸朝を待た。

「もう一と月よ。」

「今月の末よ。」

樂しげな聲が互ひに交はされる、寛から長い手紙が来た。

「私は今ま滿洲を旅行しつゝある、當分音信が出来ないかも知れん、此の次の音信は私の口からお前の耳へ直接に語る事だ、お腹の工合はどうか、私が歸るまで生れずに待てくれと胎兒に命令けてくれ。寒さは烈しい零度以下だ、だが私は暖かい、お前の心を身體に着て居る私は誰れよりも一番暖かい、昨夜夢を見た、お前と二人で嬰兒をあやして夢を見た、天使の様な嬰兒だよ、夢が覺めると私は膝を抱て居たのだ、笑つちや不可いよ、左様なら……月末には歸る



よ。」

母と百合子と三人で幾度も読み返しくくって笑つた。

此の平和な家庭の棟の上に暗い、雲が翼を擴けつゝあつた。

櫻子はカレンダーを繰て微笑した。一枚二枚三枚、もう二十枚を繰れば良人が歸るのだ、昨日百合子は待ち遠しいと言つて二日分一度に破つたので、曆の表では一日だけ日が早くなつて居る、其れを思ひ出して櫻子が笑つた。

と突然女中が入つて來た。自働車の音が表に聞える。

「お客様でございます。」

「誰方？」

「青山のお宅からださうです。」

「あ、お父様からお使なの？」

「お立關に待てるらつしやいます。」

櫻子は直ぐに立關へ出た、如何にも外套を着た男が其處に立て居た。

「あ、奥様！」と男は狎れしく言つた。

「私は黒川です、お見忘れでございますか。」

「あ、さうですか。」と櫻子は一向見知らぬ此の男の顔を見やつて言つた。

「只今侯爵からお電話でございまして、寛様は急病で入院なすつたさうで。」

「えつ？ 麻生が？」と櫻子は仰天した。

「横濱まで無事にお着きださうですが、急にお悪くなつて病院へ漸とお入れ申したさうですが、どうも今晚までは難かしいさうですから、たつた一日なりと奥様がお目に掛る方がよろしからうと殿様のお言葉でございます、若し何なら私に御一緒申し上げろと……」

「あ、。」と櫻子は意外の言葉に只だ茫然と立ち盡くした。

「一刻を争ふ場合ですから、どうぞ。」

「参りませう、参りませう。」と櫻子は慌たしく言つた。「私お母さまに爾言て直ぐ参りませう。」

「御隠居様は今しがた青山の御邸へいらつして其れからお立ちになると仰有つてました。」

「まあ、それでは私は直ぐに、私も……」

櫻子は殆んど狂するが如く自動車に乗た、若し黒川の注意がなかつたら外套も襟巻も忘れてしまふのであつた。

『あゝどんな病氣でせう、そしてもう生きてる中にお目に掛れないんでせうか。』

彼女は自動車で其れを言ひ續けた。

『多分々々大丈夫だらうと思ひますが。』

黒川は慰める様に言ふのであつた。

自動車が麻生家の門を出る時百合子は學校から歸つて來た。

『あらお姉さま、何處へ？』

櫻子は車の中から何やら言たが聞き取れなかつた。

『お姉さま。』と百合子は姉の顔が愁に満たされてるのを見て呼びかけた。自動車は疾風の如く去た。

『どうしたんだらう。』

百合子は不思議さうに見送つて家へ入つた、卓子の上を掻き散らされて如何にも姉が慌てた

狀が想ひやられる。

『どうしたんだらう。』

彼女は女中のお鶴を呼んで仔細を聞いた。そこへ再び自動車の音が聞えた。

『誰れだらう。』

出迎へる間もなく久子は蒼白になつて車から轉がる様に降りた。

『百合さん、お姉さまは？ 櫻子さんは？』

『只今何處かへ。』

『えつ？』

『お父様のお使だといふ人が見えて、お兄さまが大病だからつて……』

『あゝ晚かつた。』と久子ははたりと玄關へ坐り込み『それは嘘です、私も其の手で青山へやられたのです、行て見ると跡痕もない事です。』

『あら嘘なの？』

『警察へ行きませう警察へ……これは屹度何か計畫のある事でせう。』

「お母さま！」

百合子もばたりと坐つて久子の膝に顔を埋めた。

實家から父の眞木男爵は喘息を休めて自動車に乗て来た、八方の警察署へ電話を掛けた、警視廳から刑事三名もやつて来た、椿侯爵は病中とあつて家令が代理に顔を出した。併し何の手掛りもない。櫻子の乗た自動車の番號を知て居るものもなければ、迎ひに来た人間は色が黒く肩が四角で古風な帯皮の付いた外套を着て居たといふ事だけを女中が知つてゐるのみであつた。

而も自動車と摺れちがひになつた百合子は自動車が門を出てから土手の方へ行た事は知てるものゝ運轉手や其他の人々には些しも氣が付かなかつた。

何のために櫻子を誑き出したのだらう、其の理由が解れば其れから其れと目當てが付くのだが其れすら解らない。

「何か恨みを受ける様な事はありませんか。」  
と刑事が言ふ。

「決して……一切世間と交際しませんから。」

「では若しも誰か邪まな戀を懐くといふ様な男がある様に思はれませんか。」

「そんな事は少しもない様です。」と久子が言ふ。

「或は外國人でお邸に往來する人がありませんか。」

「いゝえ。」

これが曲者の行爲とすれば一家の事情を悉しく知つて極めて巧妙に行つたものである、先づ母の久子を青山の眞木家へ誑き出して其の空虚を襲ふた點に於ても尋常のものでない事が想像される。其れにしても曲者の目的は何にあるか。

一應室内を調べ、前後の模様を聴き取た上で三人の刑事は麻生家の門を出た。

「只事でないよ。」と石渡刑事が小聲で言つた。

「凡ての犯罪には目的があるのだが、これは何だらう。」

「色情だね。」と三宅刑事は言つた、三宅は老巧を以て聞えた男で、刑事を奉職する事二十五年間に及ぶ、其の半白の頭にも皺深い額にも刀痕がある、片方の眼は或る強盜を逮捕する時に斬り

付けられて殆んど用をなさないので、右の眼一つで確かに十人分の鑑識をすると噂せられてる。彼に一つ目といふ綽名があつた、此の男の刑事哲學は恠うである。

『どんな犯罪でも色情が根本だ。』

三宅の言葉の次ぎに鍋井刑事は頭を掉した。

『いや、これは頃日流行る人質だ、日本が不案内の櫻子を誑き出して人質に取て、金と交換しやうと言ってくる奴だ、明日になつたら屹度匿名の手紙が来るよ。』

鍋井は三十五六、品川沖の首無女の犯人を擧げてから頃日一時に有名になつた男である。彼は背丈が低くて五尺に足らぬ、瘦せて細くて頬がこけて眼玉ばかりが大きい、不思議な事には彼の身體が殆んど忍術家や輕業師に適當しい柔かさを有て居るので、どんな狭い穴でも、頭さへ入れば身體も屹度入れて見せると公言して居る、で仲間達は彼を『猫』といふ名を付けた、顔が白いから白猫とも言て居る。

白猫の鍋井は「人間の犯罪は金にある」といふ持論であつた。金が欲しいために良心が麻痺する、どんな手段でも選ばぬ、無論金の遣ひ道は、贅澤、色情、遊惰いろくあるが、要する

に世の中は金のために生きて居るのだ。

色情論の三宅と黄金論の鍋井とは麻生家の問題に就ても明らかに見解が異つた。

獨り石渡刑事は、これに對して何の考へも出なかつた、彼は刑事巡查としては極めて新米で、僅々三年にしきやならない、彼の年も漸と三十に届いたばかりである。

三年間刑事をして居る間に石渡は成績極めて悪かつた。一つは賭博犯の見張に行つた時に、同僚の來るのを待てる間に一杯機嫌で戸の外で眠り初めた、舩に驚いて犯人共が散てしまつた、其の次には淺草で不良少年狩をして、十五六人も抑へ付けたは可いが、少年共の語る處を聞てる中につきつかり同情してしまつて、皆に麥蕎を食はして放還してしまつた、恠ういふ風で彼は毎も失敗しては刑事課長に叱られて居るが、課長は決して彼を免職もさせず又た轉職もさせなかつた。彼は平素は粗忽者で思慮に乏しく何の取柄もない男だが、一合の酒を飲むと恐しく沈着いて大膽で、殆んど天才的な計畫が嗚嗚に續々と閃めいて來る。飲まない時は阿呆で、飲むと伶俐になる。併し彼には未だ是ぞといふ綽名がなかつた、刑事も一つ目か白猫とか綽名される様になれば立派に一人前なのだ。

二人には途中で別れて石渡はふらふらと土手傳ひに歩いた。

『どうも見當が付かない。』

彼は頭を掉た、先輩一つ目は櫻子に思を寄せてるもの、所爲だといふが、臨月になつてる女を誑き出す位なら、もつと前に誑き出しさうなものだ、但し其のお腹の中の兒に就て何か思惑があるといふなら是れは又た別問題だが、單に櫻子の身體を自由にしやうといふならどうしても理窟に合はぬ、臨月の女を……馬鹿な。』

彼は此の時ひらりと何等かの手掛りを考へ付いた様な氣がした、で其れを確かめやうとする間に彼の眼は濠の向ふ側の酒旗の招牌に留まつた。

『熱い奴を一杯やりてえな。』

で折角の手掛が頭の中に引込んでしまつた。

『だが白猫の様に人質が目的だとも思はれねえ、金が欲しいなら、そんな危ねえ事をしなかつて妹の百合子を引き出す方が、うんと金になるんだ、臨月の女をお前……』  
又た何ものか、閃めいた。

『臨月の女を引張り出すてえのが此の事件のヤマなんだ、それだ。』

彼は鑛山師が山の露頭を掘り當てた様な喜びを感じた、そして今度こそは忘れないぞと自分を勵ます様にした。

『さうだ、臨月の女を引張り出した處に、何かあるんだ、して見ると……して見ると……』

頭が大事な處でほやくと曇り出した、

『待て……、して見ると、女は其の……』

八幡パーと書いた招牌がきらりと日に輝やいて、其處に今ま車夫が車を置いて頭で暖簾を分けて入つた。

『畜生め、うまくやつてやがるな。』

彼は褌口を袂から出して調べて見た。

『九十八錢、此の五十錢の紙幣は恐ろしく汚ねえな、此の汚ねえ奴を褌口に入れて置くのも糞だから、一つ……』

彼は非常な足の速さを以て土手を降りて見付の方へ出た。

八幡パーは八幡様の下にある、煮込にしる飯にしる漬物にしる、分量が多いので評判になつて居る、お客はいつも満員だ、石渡が入つた時は辛うじて一人の客が立た處であつた。

「いらつしやい。」  
棒讀みの様な調子で、背が低く、年の割合に尻の肥い小女が叫んだ。

「姐さん、一本頼むぜ。」  
彼れは指を二本出して二合といふ暗號をした。

「へえー。」  
この聲が又た棒讀であつた。

「いやに營養充分だね。」

彼は小女の腰の邊りを見て笑つた。長い臺を挟んだ二た流れ四側の客は皆な笑つた。

「あ、快い氣持だ。」  
彼は未だお銚子が來ない中に既に一種のパーの氣分に依つて元氣づいた。

馬鈴薯と牛肉と葱の煮込みに澤庵と鮎の刺身、酒はどろりと黄金色の先づ眼に見た許りで喉

がぐいぐい、鳴り出す。煙草の煙や煮物の湯氣や群客のいさで廣くもあらぬ此の薄暗い室が濛と曇る。

石渡刑事が中へ入つた時に、丁度隣の客は向き合つて居る客と何か夢中に話して居たのだが、一寸腰を折られて急に盃を嘔み干した。誰しも慙ういふ場合には何だか親めない様な氣がするもので、先來の客と新來の客と睨み合の姿になる。

石渡は肴には箸も付けずに、先づ熱燗の一盃をぐつと引掛ける、二盃三盃、熱燗がひりぐと喉を通ると胃の處で何かぐるぐる廻りをして直ぐ凝と下腹に落着く、空腹ではあるし、寒さに慄へた身體が少しづつ、暖か味を感じると、ほのかに春めく體内の温氣が何とも言へぬ嬉しい心持に變じて來る。

「何しろね、親の命令だから仕方がねえやな、女の子は反抗ふ力が無えからな。」

隣の四十恰好の無尻の黒羅紗の外套を着た男が、恐ろしく赤い鼻を指先でちよいぐ撫でて向側の二十七八の若い職工らしい男に話しかける。

「全くだ。」と若い男は合槌を打つ、

「女だからな。」

「さうだ、女は何しろ男と異つて、いやだとは言へねえ、可哀さうにな。」

「うむ。」

「これから妾奉公するにや腹の兒が邪魔になる、折角の好い口を取逃がすといつまでも食ふや食はずで居なきやならねえ、生れてしまへば可哀さうだから殺しも出来ねえが、生れねえ中なら暗から暗へやつてしまふ分の事だ、親のため又た自分のために、何とか思案をしてくれねえか、恚う言はれた時にやお勝も吃驚した。」

「さうだらうとも、うむ、それから？」

「お父さん、それぢやお父さんは私を寢酒の料にするんですか、恚う一言言たきりだ。」

「うむ。」

「其れがお前、墮胎の罪で監獄だ、なあおい、親の寢酒と赤ん坊一匹と娘の監獄人だ、今の世の中は其れだよ、いくら親だつてな……」

「それを捕ゆる刑事も刑事だよ、そんな事は見逃してやらなきやならねえんだ、刑事なんても

のは、一人を舉げれや幾干つて褒美を貰ふんだらう、だから人情でえものを知らねんだ、人情をな。」

「昔の大岡さまの様な人は無いんだね。」

「俺はその親が憎いよ、腹の兒が、ねえおい腹の兒がよ。」

若い男は充分に酔ふて同じ事を繰返すと、隣の男は頬りに鼻を撫で、石渡を振り向き、

「邪慳な親もあつたもんでさあ。」と言葉を掛ける。

「全くね、なる程、うむ。」と石渡は慌て、答へた、實は彼は別な事を考へて居たのであつた。

彼の耳には只だ腹の兒くといふ聲だけが聞えた。そして其れは自分と何等かの關係がある様に思はれた。

假令ば遠くの方から動いて来る人を見る、何となく知つてる人に似て居ると思つて居ると段近づくに従つて確かに其れは友人である、石渡は二合の酒にとろりと酔ふて居たが、二人が勘定を済まして出て行つた後で突然彼の頭に閃いたものがあつた。

「わかつた！」

彼の頭はびんと音がして錠が開いた様な気がした。明晰と極めて明晰と彼は意識した。

「問題は腹の兒だ。」

鍋井の言ふ金銭でもなければ三宅の言ふ色情でもない、櫻子の腹の兒が此の事件の根本だ、彼は恚う思つた。

石渡刑事は漸と此處まで考へて一條の明るい路に辿り付いた心持で八幡バーを出た。

「問題は腹の兒にある。」

しつかりと恚う前提を置いて其れから其れに伴ふ理由と又た其れと反対な想像と兩方から斟酌して見て、終りに元との前提に復り、そこで急に前後も顧みずに突進するのが彼の探偵方法であつた。

一體腹の兒がどうして問題なのだらう。

彼はもう一度考へざるを得なかつた、腹の兒が欲しいといふのか、但しは憎いといふのか、此の二つに依て、方針が全然異らざるを得ない。

欲しいといふなら此に一つの疑問がある、櫻子と麻生男爵との間に出来た子ならば他人が欲

しがるべき筈がない、して見ると櫻子は男爵以外に情夫がなければならぬ筈だ。或は櫻子は結婚前から別に情夫があつて其の情夫が男爵の留守を覗つて誑き出したのか、但しは男爵との間に子が出来たのを嫉んでの所爲か。

恚うなると三宅の色情説が此の事件に最も適當な説となる。して見るとこれは第一に櫻子に情夫があるかないかを調べる必要があるのだが、麻生家の家庭、寛と櫻子の關係から推すと、絶対に其の疑ひを容れる餘地がない、して見ると、色情論は全く根據とするに足らぬ。

そこで胎兒論をもう一度考へて見ると、これはどうしても胎兒を憎むもの、所爲だ、なぜ胎兒が憎いだらう。

石渡の頭は酒に熱すると共に、段々明晰になつて來た、彼は丁度獵夫が銃先の十歩前に鹿を見つけた様な気がした。

「なぜ胎兒が憎いだらう。」

憎むに二種ある、一は嫉妬、一は利害、これである、昔の御家騒動では妾が正妻の子を殺さうとしたり、正妻が妾の子を殺さうとしたりしたのは嫉妬と利害を兼ねて居る。



「三つの中何れだらう。」

此の時彼は何の理由もなしに此の犯罪者は男であるか女であるかを調べる必要があつたのだと思つた。

「それだ、それで解るのだ、若し男だとすれば子を憎む理由が他にある、女だとすれば嫉妬から来たので極めて簡單だ。」

筋道を辿り辿つて漸やく此處まで漕ぎ付けた時彼は急に懐から手帳を出して鉛筆で書き留めた。

「男か女か、麻生家を横領せんとしつゝある女があるか無いか。」

彼はそこで急いで警視廳へ歸つた。警視廳では今ま何となく暗雲が漲つて居た。元來警視廳の刑事室といふものは普通に考へると犇猛な顔や陰險な眼が集まつて闇魔が帳面を擴げる様に、恐ろしい陰惨な空氣の中に如何にして罪人を多く造り上げやうかと苦心するもの、様に思はれるが、實際は全然反對である、銘々功名手柄をしやうといふ野心のために同僚にさへ滅多に職務上の話をしない、駄洒落やら太平樂やら、酒の自慢やら鰻井を七つ食つた話やら、終

りには狼らな女の話にまで落ちてしまふ。

だが此の日は非常な混雜であつた、其れは此の二三日前から東京は愚か日本全國の或種の人民が議會に強襲を試みやうとする形勢があるので、如何にして其れを防遏しやうかに苦心して居るのであつた。或る種の人民とは昔から機多と稱する一部の階級で、これは些細な點から議會の大問題とならんとしつゝあるのだ。

此の騒ぎの最中に麻生家夫人誘拐事件が起つた。

「秘密に〜。」

秘密萬能主義の政府は、各新聞通信社に向つて絶対に麻生家の事件の掲載を禁止した。

八

室の片隅では白猫の鍋井と一つ目の三宅とが額を寄せて頻りに話して居たが、石渡の來たのを見て白猫が問ひかけた。

「どうだい、見當が付いたか。」

「いや、少しも。」と石渡は答へた。

「君には難かし過るよ。」と一つ目は冷やかに笑つて「今まで何を調べて来た？」

「何も。」と石渡は暗く答へた。

「自動車は？」

「千六百臺の自動車の中で、運轉手の行方が今だに知れないものは五臺ある、其の中三臺は藝者を載せて行つたのだから今に解るが、二臺は解らない。」

鍋井は恚う言つた。石渡は餘りに其の機敏なのに驚いた。

「停車場は？」

「巡查と赤帽とを調べたが、其れらしい手掛がない、混血兒だから誰にでも解るのだが。」

「して見ると市内に潜伏してゐるかね。」

「それは二臺の自動車の中、何方からうと思ふが。」

自動車の運轉手を唯一の手掛りとするに至つては實に心細い、此の犯罪はさういふ外間の間

題でなくて、もつと込入つた内輪な點から考へ出さなければならぬのだと石渡は恚う思つた。

「君の考へは？」と三宅が訊く。

「僕は此の犯罪の目的は腹の兒にあるのだと思ひます。」と石渡は少しく醒めかけて来た酒の後の寒さを感じながら言つた。

「腹の兒？」と鍋井は笑つた。

「いや、それは一理ある。」と三宅は笑ひもせずと言つた。

「それで？」

「腹の兒を什麼かしやうといふのが目的とすれば、其は嫉妬であるか、但しは利益問題か……」

「色情的に考へると嫉妬だ。」と一つ目は言ふ。

「いや、胎兒を什麼のといふ事ではない、今に人質を取りに來いと手紙が來る。」と鍋井が言ふ。そして何か思ひ出した様に其處を去た。と三宅は其の片目を大きくしたり小さくしたりして何事か考へて居たが、聽て小聲に言つた。

「石渡！ これは大變な事件だよ。」

「はの。」

「下手まごつくと高等刑事の方に取られてしまふよ。」

刑事の中でも普通の刑事と政治上の問題に活動する高等刑事との二種ある、此の二種は互ひに反目の間柄であつて、高等係の方は毎も充分の機密費を使用する事が出来るし、其の職務も自然と上流階級に属する處から、普通係の方を下目に見て居る、彼等は普通係を掃除夫と稱して居る、其れは人民の汚ない缺點を探し廻る事を言ふので、一方普通刑事の方では高等係を野良息子と言つて居る、ぶらく遊んでは機密費の脛を齧るといふ意味である。野良息子と掃除夫とは何かに付けて衝突が多い、搜索係長の一つ目は其の経歴から言つても掃除夫の系統に属するのであつた。

「どうしてですか。」と石波は驚いて言つた。

「さあ、君の意見に依ると、お腹の兒に問題があるとするれば、僕の平常言ふ通り色情論になるね。」

「さうかも知れませんか。」

「さうなると、嫉妬、御家騒動、此の二つを考へると、麻生家に因縁のあるのは椿侯爵の末の令孫瑠璃子さんが、重要な嫌疑者に當るんだ。」

「瑠璃子さん？」

「さ、さうとも、あの女は君、麻生男爵とずつと前に浮名が立たた事もあるし、幾度も結婚の噂が傳へられたんだ、其れが男爵と櫻子さんと夫婦になつて……」

三宅は此まで言つて、はたと口を噤んだが、聴て片目を急に上げたり下げたりした、これは三宅が何事かを的確に考へ付いた時の表情である。

「君？ 大變だ」と彼は一層聲を低めた。「男爵と櫻子さんとは未だ入籍になつて居ないよ。」

「なる程。」

「これが、その……こりや大變だ。」

一つ目の三宅が順序を正して言ふ處は一々道理である、石波は流石に老探偵の頭腦の明晰なのに驚いた。といふのは其れだけ彼自身の頭が朦朧となつたのである、酒はもう全く醒めてしまつたのだ。

「君はね、大變な役目を背負ひ込んだよ。」と三宅は同情する様に言った。「殊に依ると君も僕も免の字になるかも知れない。」

「そんなに重大な事件ですか。」

「あゝさうとも。」と三宅は腕を拱んで「お腹の兒に考へ付いたのは全く豪い、今に僕なんか到底及ばなくなるよ、若い人は實際豪いね。」

「さう言はれると恐縮です。」

「いや、君は今に大した刑事になるよ。」と三宅は感心して「だが氣の毒だ。」

「どうして？」

「被害者は一流の華族だ、君の考へ通りに歩を進めると瑠璃子さんを拘引……いやその覺悟で調べなきやならん、さうして見た處で證據が擧がれば可いが、擧がらなきや責任上詰腹を切らなきやならんぞ、さあ其れだ、一六勝負だ、危ないなあ。」

「併し瑠璃子さんと決まつては居ますまい、他に又た……」

「いや色情は犯罪の根本だよ、昔から最も慘酷な犯罪をするものは下等社會よりも上流社會

に多いよ、孕み女の腹を割て見て喜んでる皇后が支那にあつたさうぢやないか、まあさう言た様なものだよ。」

「それはさうですけれども併し椿侯爵の……」

「待てくれ、待て。」

三宅は室を出て次の室へ入つた、而して間もなく戸口に現はれて石渡を手招きした。従いて入ると大きな戸棚の前に一つ目が蹲んだ、而して其の抽斗から寫眞帳を取出した。

「これだ、君は瑠璃子さんを見た事があるか。」

「いや未だ。」

「さうか、僕は三年許り前にあの梅原……それから武州土地會社の梅原さ、あれが大熱々になつてあの令嬢を追駈け廻してゐる時に、二た月許り尾行して見た事があるんだ、中々の手取でね、散散男を惹き付けて置いて、いざといふ時ずどんと食はすんだ、實に其れは見事なもんだよ、それこの女だ、別嬪だらう。」

大きな四つ折の寫眞……紋付姿の瑠璃子が其の豐滿な妖艶な頬、房々した上品な東髪、人を

魅する様な眼がはつきりと寫つて居る。

「あゝ美人！」と石渡は思はず言た。

「涎を流しちや不可えよ。」と三宅は寫眞を自分の方に向けて「左ほど顔立が可いんぢやないが、華族や金持の令嬢には一種の型があるよ、そしてどんな可笑しい顔でも上品に見せるものだ。藝者には顔が素的に素人でも、此の上品さが無いんだよ、矢張り食物が異ふんだね。」

「さうかも知れませんか。」

「處で君、参考のために教へて上げるんだがね、犯罪は色情だよ、可いか。」

「幾度も聞いて居ます。」

「は、は、は、全くだ、可いか、探偵は色情の事に精しくなきやならんのだ、そこで君、第一に骨相學を知る必要がある、可いか、此令嬢の顔は全體から言ふと丸顔でなければならんのだが、瓜實に見えるだらう、其れは鼻が長いためと今一つは厚みが無い、つまり奥行がないのだね、奥行のない顔の女は輕薄で派出好で締りのない性質が多いのだ、其れから此額が平でないね、これが抑々此の女の特長だよ、非常に自惚が強いんだ、自分の力で何事も成し遂げ得るといふ

確信がある。これは男と反對で男は額の平たい人に自信の強い人が多いが、女はさうでない、而して恚ういふ女は亭主を有ても終始争ひが絶えないのだ、何事につけても自分が先に立つ、恚う解剖して見ると此の令嬢は傲慢で派出好で締のないお人好の貴婦人だ、其れでは此の女は犯罪などはしないかといふに、そこは考へものだよ、君。」

一つ目は半白の頭をがりぐと搔いて額に皺を寄せ石渡に寫眞を渡して又續ける。

「お人好で締のない者は罪を犯す事が多いのだよ、人の悪い奴なら下手な犯罪は決してしないのだ、これは面白い處だよ、只此の令嬢に就ては其の背後にどんな人があるかを考へる必要があるよ、僕は骨相上から此の女が犯罪人であるとは思はんが、之を煽動する人があれば、どうも危険だと思ふだけだよ。」

「煽動する人があるでせうか。」

「さあ其れだ。」

一つ目は、其の塞がつた眼も開いた眼も一緒に皺の中に疊み込んで凝と考へ込んだ。

其の目石渡は再び麻生家を訪ねた。麻生家では久子と百合子が眼を泣き腫して居た。その傍

に寛の親友野間三造が首を垂れて考へ込んで居た。野間は百合子の電報に依て直ぐ駆け付けた。そして一伍一什を聞いた彼は、其の親友の最愛の妻が留守中に誘拐された事を心の底から腹立たしく感じた。

加州のベニシヤの平野で、曾ては羊の群に交じつて共に遊び、二人を伴れて二十日間海上に睦まじく暮らした此の姉妹の一人が、日本へ来て斯る災難に遭ふとは何たる情ない事だらう、罪もなき二人の少女が、我が日本を信ずればこそ遙かに頼つて来たのだ、其れに對して日本人は如何なる待遇を與へたらうか、家庭の迫害、結婚のごたく、哀れ此の二人に日本の太陽が照らなかつたのだ、其の上に此の變事！

どんな事があつても、日本の國體、國の名譽のために櫻子を救ひ出さねばならぬと彼は決心した。

「寛君が早く歸つてくれると可いがなあ。」  
彼は幾度も慫う言た。

「電報を打つにも處がわからないもんですから外務省に頼んで心當りの處へ打て下さいと言ひ

ましたけれども、旅から旅ですからね。」

久子は泣きながら慫う言ふのであつた。

「もう臨月ですから、一人の身體ではありません、其れを何だつて慫麼……」

百合子は消え入る様に泣き續ける。而して、

「お姉さんを取返して頂戴、お姉さんを……私お姉さんを伴れてデビーの處へ歸ります、こんな恐ろしい國には居られません。」

彼女は慫う言ふのであつた。そこへ石渡刑事が入つて来た。人々は刑事の姿を見て頼母しけに迎へた。

「まだわかりませんか。」

「はい、中々どうも。」

三人は再び落膽した。

「處でお訊きしたいのですが、夫人は未だ御入籍になつて居ませんか。」

「はい。」

「夫人の御實家と御當家の御關係と、其れから御親戚や何かの事を精しく伺ひたいんです。」  
久子は凡てを語つた、石渡は酒の氣がないので頭腦の空虚を感じた、そこで手帳を出して  
筆記した。

男爵 眞木宗一

父 織母

姉

妹

義妹

字多子  
櫻子  
百合子  
日出子

織母の宇多子は麻生男爵の母久子の妹である。

麻生家も眞木家も椿侯爵が後見人である。

椿侯爵の孫娘瑠璃子は麻生男爵と許婚の仲であつた。

石渡は恚う書き行く中に一つ目の言た事を漸やく思ひ出した。

「瑠璃子！ 瑠璃子！」

彼は恚う腹の中で繰返した。

「何れ兩三日中には解るでせう。」

茫漠たる事件の迷宮に入りながら、人々の歎きを見ては恚う言て慰めるより他なかつた。

彼は人々に暇を告げて麻生家を出やうとしたが、不圖彼は玄關前の砂利の中から大きな黒い

釘を拾つた。

「おう是れは。」

彼が其れを拾ひ上げる時に其處の打水の後に靴の痕が残つて居る、自動車のタイヤの痕は其

れよりも二尺も隔つた處の砂利に長く喰入つて居る。

「靴の痕！」

よく見ると尋常の靴ではない、如何にも大きな幅の廣い、爪先の開いた、丁度兵隊の靴の様

な形である。其れが縦横に亂れて居るが、熟々見ると、左の足が深く泥に食ひ入つて右の足が淺

い。

「これは不思議だ。」と彼は思ひながら直ぐに靴の寸法を精しく書き留めた。

「片方が深く片方が浅いのは跛の人に違ひない。」  
彼の胸に何とも言へぬ喜びが溢れた、刑事調査が薄給に係はらず、而も危険な職務であるに係はらず、續勤するのは難關又難關に遭遇した時突然一條の光りを發見する時の極めて神秘的な感興のためである。

「これだ、此の靴だ。」

彼はもう犯人を掌に入れた様な気がした、彼は走る様にして門を出やうとすると、自動車の音が聞えた。

石渡は直ぐに植込の中に隠れた、自動車は勢よく門内に入った、音を聞いて百合子、久子、野間の三人が櫻子の歸りかと玄關へ飛んで出た。

「小母さん、櫻子さんは……」

自動車から轉がる様に降りて久子の胸に顔を埋めたのは瑠璃子であつた。脱ぎ捨てた草履は三尺ばかり散つた。

「おう瑠璃さんですか。」

久子は恚う言て瑠璃子を抱きしめた。

「どうしたんでせう、あゝどうしたんでせう、櫻子さんは歸つていらつしやらないんでせうか。」  
瑠璃子は聲を揚げて泣いた。

「はてな。」と石渡は植込の間から瑠璃子を見て考へ込んだ。「泣いてるよ、自分がした事でない様な顔をして泣いてるよ、畜生め、女てえ奴は泣くのが奥の手だ。」

瑠璃子に泣かれて久子も百合子も益々悲しくなつた。

「どんな人が小母さん、どんな人が伴れ出したんでせう、餘まりですわ、あんまり慘酷ですわ、私、私、お祖父さんに爾言て草を分けても探させますわ。」

「まあ奥へ入りませう。」

久子は瑠璃子を伴れて奥へ入つた。

「なるほど美人だ、なるほど奥行のない顔をしてる、だがあの容子ではこんな犯罪をしさうにもない、寫眞で見るとよりおつと美人だ、首筋から胸の邊は何とも言えねえな、泣いた處は千兩だ、あゝいふ人が幾ら嫉妬だからつて、こんな大膽な……」



彼は茫然と植込の中から顔を出したまゝ、動きもせず、獨り問ひ獨り答へた。  
 「不可えく。」と彼は又た言ひ直した。「女の犯人を捕へるには顔を見るな、若い時には失策を  
 するぜ」と一つ目に教はつた事がある。」

自動車はぶうと音して後退りをした、そして運轉手は車寄の方へ方向を轉じた。  
 「おい運轉手君。」

石渡は植込から出て聲を掛けた。

「僕は警視廳の者だが、君僕の質問に答へてくれんか。」

「一件ですか。」と運轉手は言た。

「何だ一件とは？」

「此處の夫人の一件でせう？」

「知つてるのか。」

「えい、私がお送り申しました。」

「なに、君が？」

石渡は吃驚して顔を見詰めた。

「何處まで送つたのか。」

「大森と大井の間に鹿島谷といふ處があります、其處へ。」

「鹿島谷？」

「へえ。」

「何といふ家か。」

「さあ家があつたか無かつたか。」

「家が無い？」

「病院の様な處で。」

「それから。」

「わかりません。」

「どうして。」

「病院の様な家へお入りになる時に私に自動車代だと言つて二十圓下さいました。お待ちませ

うかと言ひましたら何方でも可いと仰有いました、それで三十分ばかり経てから家の人にお聞き申しましたら、そんな人は知らないと言ふんです、何でも裏へ抜けてしまつた様に思はれます、それで途中でパンクなんかして手間取て歸つて参りますと只今のお嬢様が……」

「何處で？」

「新橋の停車場です。」

「拙劣い行き方だ。」と石渡は微笑した。運轉手の言ふ處に依ると犯罪人の根據地は新橋から大森までの間にある事は明かである。慙う目星が付けば後は糸を解く様なものである。

「乗つてる人は？」

「男が二人に此方の奥さんで。」

「どんな男だつた。」

「二人の若い人は日比谷で降りました、今一人の人は黒い外套の襟を立て、居ましたから能くは見えませんが、色の黒い四十五六の人です。」

「跛ではなかつたか。」

「いえ、そんな風には見えませんでした。」

「跛でない！」

石渡は失望した。

「言葉に何か特長がなかつたか。」

「さあ。」と運轉手は考へて「どうも覚えてません。」

石渡は此の邊で質問を止めた、其れは餘りに深く訊くと、相手が却て自分の想像を加へたり又た他の記憶と混同して答へたりする虞があるからで。

彼は門を出るや否や、直ぐに鹿島谷へ出掛けた、鹿島谷は大井町と大森との間にある淋しい町で只た一と筋町の裏は島である。彼は運轉手に聞いた病院らしい家を探した、其れは半ば洋館めいた草花園である。

「なんだ、これを病院と間違へる奴があるもんか。」

餘りの馬鹿くささを感じるに付けても、彼は曲者が運轉手を晦ますための手段だといふ事が明白になつた。彼は直ぐ草花園の主人に仔細を訊ねた。

「どうも能くは解りませんが、西洋の婦人らしい方と男の人と此の門から裏の方をお通りになつた事だけは知つて居ます、一日に幾組となく外人方が花を買ひにお出になりますから。」

「で、此の裏を抜けると何處へ出ますか。」

「其れは其の……谷垂へも出られますが、大崎へも目黒へも、近いのは大森です。」

「大森？」

「はい其處のお宮の前をくると廻れば停車場ですから。」

「あ、停車場へ行たのだ。」と彼は直ぐ思つた。運轉手を巻いて停車場から又た電車に乗りに違ひない。若し其れとすれば最早や絶望である、一度び東京の外へ出れば關西四國九州、滿鮮の地方まで搜索せねばならぬ。此の事件が失敗に終れば被害者が華族だけに警視廳の責任問題となる。

石渡はひやりとした。彼は最早や永久に此の事件は搜索無効であると思つた。

「駄目だ、併し停車場へ行って聞いて見やう。」

大急ぎで停車場へ降りると其處に一つ目の三宅が立て居る。彼は直ぐ走り寄つて聲を掛けやうとしたが、一つ目は早くも黙れといふ合圖をした。今また度横濱からの電車が停まつた處なので。

「一二三四五……」

三宅は電車から降りる人の数を数へて眼をしよほくさせた。

「君の來るのを待て居たんだよ。」

人々が散た後で彼は石渡に慙う言た。

「僕が來るとどうして知つて居たんですか。」と石渡は驚いて言た。

「其りや君。」

三宅は得意さうに慙う言て今度は柱を數へ初めた。

「一二三四五……」どうしても是は今夜中に解らなければ永久に解らないよ、僕の經驗に依ると奇數は凶だ、偶數は吉だ、人情から言ても男女は陰陽だ、今日は二月の二十六日で偶數だ、電車を降りる人の數も、柱の數も凡て偶數だ、だから今日中に約その目當が付く事になつて居る、

「どうだい病院は草花屋だつたらう。」

石渡はどうして恚麼に精しく知てるかと呆れて三宅の顔を見た。

「そんな事を知らなくて刑事が出来るか。」と三宅は笑つた。

「實は僕はもう辭職をしやうかと思つてゐるんです。」

石渡は一伍一什を語つた。

「うむく。」と三宅は首肯いて「だから言はん事ぢやない、犯罪の表面だけで證據を擧げやうとする」と爾なるよ、管は幾つもあるが、水の湧き壺は一つなんだ、どつかに渦巻いたり噴き上

けたりするものがあるよ、そこを突き止めるにはねえ君……」

「人情ですか。」と石渡は機先を制した。

「參つた。」と三宅は又た笑つた。

「そこで方針は？」

「君、瑠璃子さんに會つたらう。」

「あゝ。」

「あの女が今に此の方面へ來るよ。」

「どうして？」

「大森に椿さんの別荘があるからさ。」

「なるほど。」

別荘があるなら來るのが當り前だと石渡は思つた。

「そこで君は見張をして、今夜申別荘に忍び込んでくれないか。」

「貴方は？」

「僕はこれから横濱方面へ行く。」

「横濱に何か……」

「異人さんだから横濱さ、些し平凡だね。」

三宅は眼を小さくして嘲る様に苦笑した。

「承知しました、やつて見ませう。」

「しつかり頼むよ。」

三宅は「何か手掛りを得たか。」

「いや別に。」

「うむ、よし〜。」

石渡は例の釘と靴の痕を話さうと思つたが、急に黙つてしまつた。此の時遠くから電車の音が聞えた。

「一二三四……」と三宅は数へ出して「僕は此の電車で行くよ。」

三宅が去た時には最早や日がとつぷりと暮れて居た。

「横濱へ何だつて行くんだらう、何か屹度拔擢の功名をする積だらう、よし、それなら俺だつて決して負けやしないぞ。」

「一二三四……」と石渡は三宅の様に片目を小さくして数へ初めた、丁度数の亂れかけた時に

群集の中から急ぎ足で改札口へ出やうとする一人を見た、丈は高くないが岩疊な肩幅、外套の襟を深く立て、中折帽に眼を隠し、がつしりした足踏で改札口を出る拍子に、ちらと此方を見る。

「あれだツ。」

石渡は猫が鼠を見付けた様な氣持で、胸の中は早や喜びの波が立た。彼は直ぐ件の男を追跡した。男は大急ぎですん〜歩く、石渡はのめる様に其の後を行く。

「跛のつもりだが、あの男は跛らしくもない。」

彼は歩きながら慍う思つた。次に彼は外套の色に氣が付いた。

「黒い外套だといふが、此の人は茶色の外套だ。」

彼はそろ〜失望に傾きかけた。

「併し、外套の色が燻んでるから黒に見えたかも知れない。」

彼は走る様にして漸と男の前に出た。

「失禮ですが。」と彼は言葉を掛けた、男は煩ささうに傲然と立停まつた。

「何か。」

「はあ軍人だなと石渡は思った。」

「不入斗に参りますには什麼行たらよろしいんでせうか。」

男は両手を拱んだ儘見向きもしなかつた。

「後に従いて来い。」

「有難うございます。」

石渡は後になり先になりして男と同行した、と一丁も来た頃男は聲を掛けた。

「おい君。」

「はい。」

「燐寸を持つてるか。」

「はい、あります。」

「煙草は無いか。」

「朝日でもよろしければ。」

「朝日は不味いな、併し一本呉れ。」

「はい。」

石渡は燐寸と煙草を出した。

「火を點けてくれ。」

「え、？」

「私は片輪ぢや。」

拱んだ腕を解くと片腕の袖がだらりと平たく垂れる。

「これはどうも失禮しました。」

「いや何も失禮な事はない。」

男は煙草を手にして差出した、石渡はぱつと燐寸を擦つた、彼の目的は煙草に火を點ける事にあらずして外套の釦を見るにあるのだ。

「若し同じ釦であつて、其の中の一つが足りなかつたら確に此の男だ。」

彼の胸は轟いた、而してぱつと光る一瞬間こそは此の事件の決する時だと思つた。擦つた燐寸は直ぐ消えた。又た擦る、又た消える。

「下手ぢやな君は。」と男は笑つた。

「どうも風がありますので。」

「待て、防風の設備をしやう。」

男は片手で外套の釦を外した。

「それは可いお考です、お外し申しませう。」

石渡は逆上あがる程の嬉しさを咏へて外套に手を掛けた。

「一ツニツ三ツ。」

外套の釦は一つも缺かさず揃つて居るのみならず釦は外套の色と同じく鮎色のものであつた。

「駄目だ。」

彼は落膽して手を休めた。

「早く擦らんか。」

男は叱り付ける様に言た。彼は燐寸を擦つた、煙草の煙が暗の中にめらくと揺れ出した。

「釦を掛け直してくれ。」

「はい。」

「は、許してくれ、煙草を貰つたり火を付けさしたり釦を掛けさしたり、大きに失敬した。」

「いやどう致しまして。」

「だが君は不入斗の何の邊へ行かるのだ。」

「い、え其の直そこなんです。」

「知つとるのか君。」

「いや存じません。」

「番地がわからんか。」

「百何番地とか申しまして。」

「百何番地は私の今行く處だ。」

「い、え其の五百何番地で。」

「不入斗は三百までしきや無いぞ。」

「何番地でも其のよろしき様に。」

「番地がわからんと困るが、何といふ家ぢや。」

「家は其の石渡……」と仕方なしに自分の姓を言ふ。

「なに？ 石綿を賣る店か。」

「いや石渡と申します家で。」

「はてな、石渡、あゝ二三日前に首縊りのあつた家は確かに石渡とか言つた、君は其の親戚か、老婆を虐待するのは宜しくないぞ。」

「へえ、どうも済みません。」

「あの家なら中々わかりにくい、煙草のお禮に私が案内してやらう。」

「その……首縊りの家にでございますか。」

「遠慮は要らん。」

「いえ、其れでは恐縮でございます。」

石渡は這々の體で漸と男に別れて辻を曲つた。

「人を馬鹿にしてやがる。」

彼は曲がるや否や帽子を脱いで汗を拭き、振返つて見ると男は未だ立て居る。

「わかつたか。」と大きな聲で怒鳴る。

「はい、わかりました。」

「首縊りの家はそこから二軒目ぢや。」

「有難うございます。」

男はのしり／＼と歩く、其れを見届けて彼は靜かに元との處へ來た。而して凝と地面を見詰めた。日影乏しき田舎路とて、今朝の霜柱は一旦解けて又た凍りかけて居る、其處に點々たる靴の痕、彼は指先を以て其れを測つた。

「靴は確かにあの男だ。」

で彼は歩いて見る。

「どうして片足が深く片足が浅いんだらう。」

彼はいろいろに足や手の力を入れ替へて見た。



彼は又しても大なる喜びに觸れた。

男の姿が見えなくなつた時、石渡は直ぐ大急ぎで男の後を従けた。男はばつくと煙草を燻ゆらして行く、暗に其の火先だけが折りく見えた。同じ様な町を幾つも曲がつた、と聽て石垣を繞らした大きな邸の前に出る。音もせず男の姿は消えた。

「はてな、何處だらう。」

邸の前へ廻つて見ると丸い電燈が一つ點つて門に懸えた松を照らして居る、太い門柱、そこに何んにもない、石渡は塀に沿ふて反対の方へ曲がつた、そこに小さな潜り門がある、椿勝手口と小さく書いた札が掛けられてある。

「これだ候爵の別荘といふのは。」

元來候爵の本邸は目白で、候爵は他の大臣や元老と異ひ、年百年中目白の本邸に居る、併し一朝何か事ある場合にはふらりと大森の別荘に隠れる、これは候爵の十八番で、内閣の風雲が急であるか否かは、候爵の目白か大森かに依て測知する事が出来るのだ。

で、候爵の留守中は大森の別荘が毎も瑠璃子や其他の孫娘共の遊び場所になつて居る。石渡は

勝手門の外に立ていろく考へた。

「今の男は此處から入つたに違ひない、其れとも何處か他の家へ入つたらうか。」

彼は什麼かして中へ入りたと思つた、併し潜り戸を開くと音がするだらう、見咎められては一大事である、彼は何かな好き方法を考へ出すべく五六間向ふの塀の下に立て遠くから隙を窺つた。

「瑠璃子さんがもう來さうなものだ。」

恠う思つて居ると、ひそく話し聲がして内部から戸がガラ／＼と開いた。

「本當に大變よ、こちらへ被來しやると急に忙がしくなるのよ。」

「電話を掛けると言ても、先方に電話がなけれや矢張私達が御使に行かなきやならないんですものね。」

「その代り平素は氣樂だわ。」

何れの女中も骨惜みをするものだとして石渡は此の對話を聞き流して直ぐに二人の女中が遠ざかると共に、思ひ切てがら／＼と戸を開けた、中から誰も咎めるものがない、そこで彼は此の別

莊は毎も若い女中共にはかり任せきりにして老人が居らぬのだと気が付いた、彼は段々に奥深く進んだ、凡て二頭ばかりを入れるだけの厩がある、馬は留守だが、綺麗に掃除が行届いて居る、彼は其處を過ぎて植込を潜り、次第に裏へ出ると西洋館から灯がばつと漏れる。彼ははつと首を縮めた、而して直ぐにひたと窓の下に身體を着けた。恐る／＼首を延ばして窓框に手を掛ける、窓が高いので踏臺がなければならなかつた、彼は兎も角老侯が居るか否かを確かめようと、窓框に掛けた手に力を籠めて、ぶら下がる様にして首だけをひよいと出した。ちらと見えたのは老侯の姿である、而も其れは餘りに明晰と此方に向いて居たので、彼は、はつと思つて地上に降りた。

『見付かつたらうか、但しは……』

もう一遍見たいと思つた、で彼は又たぶら下がる、指先の力だけでは全身を支へる事が出来ない、顔を窓の處へ出したかと思ふと又た引込める。

『しまった、侯爵だけは見えたが、他に誰か居るか居ないか見なかつた。』

窓には帷が垂れてある、帷と窓端との隙間は凡そ一尺位であつた、そこに工合よく顔を持って

行く事は中々困難であるのみならず、餘り近いと内部から見付けられる。

彼は窓の下を這ふ様にして庭を探し廻つた、其處に摺鉢よりも大きな植木鉢が幾つも、重ねられてあつた、彼は其の一番大きなのを拾ひ上げた。

『これさへあれば大丈夫だ。』

植木鉢を逆さに置いて其上に上ると、丁度眼の處が窓の一番下の硝子に當る、そこで彼はなるべく窓帷の陰に顔を置いて内部を覗いた。老侯は獨り端然として腕椅子に倚つて居る、其の背後に暖爐が勢ひよく燃えて居る。

瘠せて骨ばつた顔、高い鼻、一文字に結んだ口、流石に弱年から國家のために東奔西走した元勳の面影は威嚴あるものだと思つた。室は靜である、沈黙した老侯の顔は愈々緊張して木彫の如く固くなつた。彼は今何事を考へつゝあるか。

目下問題となりつゝあるものが数へきれない、朝鮮人虐殺問題、米國宣教師變死問題、社會主義者陰謀問題、普通選舉問題、全國新平民の公憤問題、某重大事件、新聞に掲載を禁止して居る重大事件だけでも五つも六つもある。

「煩さい奴ぢや。」  
 彼は微かに恚う言た。實際彼に取ては凡てが煩さかつた、不逞の朝鮮人が政府を襲はんとしたに對して軍隊が防過した、それが何んで虐殺であるか。米國宣教師が朝鮮人に殺された、一殺人犯である、それを何故外交問題に牽強附會するか、社會主義者！西洋かぶれの無賴漢の言ひ分を何故新聞雜誌が持て囃すか、普通選舉！下司下郎の立ちん坊などに天下の事が議せらるゝか、馬鹿な。

凡てが輕薄で、凡てが不忠不義である、此の儘で行たら日本が今に滅亡する、俺の造りあけた日本が滅亡するのだ。

日本を造り上げたものは自分である、自分達同志である、彼は恚う信じて居る、實際日本維新に於ける彼は幾度か白刃の下を往來した、彼の若い血は只だ皇室と國家にあつた、同士の中で兇手に瘡れたものが多い、残つたものも大方は老死した、只だ此に二三人、其れは元老である。然るに今日の政治家と稱するものは元老ほど眞剣でない、本當に自分の造り上げた國家であるといふ愛着心がない、彼の眼から見ると凡てが不忠不義である。

「新平民の同盟問題！」

華族が新平民と結婚する事を拒絶したとて其れが何か、苟も血統を尊ぶものは誰だつて其れを否認する、華族の權利だ、私其れを言た所で議會の問題にするとは何事だ。

考へれば考へる程、世の中が墮落した、其れを救ふには強壓にあるんだ、さうだ強壓だ、彼は深く、唇を噛んだ。

「豪い顔をしてる、あの瘠せた顔を以て大臣達を小僧の様に使ふんだ、豪いもんだ。」

石渡は恚う思ふと膝が顫へ出した。

「こりや什麼もならん。」

抑へれば抑へる程膝ががく、くする、齒の根が合はなくなる。

「どうもならん。」

鉢の上を降りやうとする途端扉が靜かに開いて一人の人が現はれた、其は先刻の男であつた。

「あつ、彼奴だ。」

腦天に何か響いたかと思ふと、戦慄がひたと止まつた。彼はかつと上氣した。

「只今……」は男は言った。

「おう、どうした。」

「はい、無事に……」

「御苦勞だつたね、併し榎崎。」

「はッ。」

「國家のためだからな。」

「左様心得て居ります。」

「氣の毒だが……」と侯爵は横を向いて「止むを得ん。」

硝子のために確とは聞えぬが、これだけでは何の手掛りにもならない、察する處、櫻子の事件は老侯とは全然無關係なのだ、無論老侯が櫻子を誘拐するなんて、そんな筈があるべき道理がない。して見ると、櫻子の事件はあの男と瑠璃子を調べて見るのが至當である。

石渡が慫う思つた時、再び扉が開いて、瑠璃子が轉がる様に入つて來た。

瑠璃子が入つて來たので室は急に明るくなつた、黒い髪や白い襟足や、柳縞の荒い金紗の羽

織などが電燈に輝く、瑠璃子は桃色の手巾を持って突如それを顔に當てた。

「お祖父様！」

それだけが窓の外に聞えた。瑠璃子を見るや否や老侯の顔が急に和らかになつた、今まで黙考して居た峻嚴な陰慘な顔とは全然異つて尻尻は皺の中に埋もり、腫は愛着の優しさに輝やいた。

「どうした。」

瑠璃子は老侯の傍に坐を占めて何事かを語り續けた。其の眼は濡れて兩瞼が紅らんで居る、彼女は幾度もく手巾を顔に當てた。

「私は知らんよ、そんな事。」と老侯は笑つて言た。

「でもお祖父さまのお力で何とかかなります様にね。」

「私の知た事でない。」と老侯は猶ほ笑ひ續けて「困るなあ、榎崎、どうしたもんだらう。」

榎崎は四角な黒い顔を瑠璃子に向けて是も微笑した。

「お嬢様、そんな事は警察に任してお置きなさい、多分直きに解るでせうから。」

「でも榎崎さん、これが解りませんと私が嫌疑を受けるぢやありませんか、誰が考へたつて矢張り私に……」

「まさかお嬢様が……はい、はい。」

「いえ、刑事の様なものが私の後を尾行てるのよ。」

「そんな無茶な話があるもんか。」と老侯が言ふ。

「ですから、一日も早く櫻子さんの居所がわかりませんと。」

「まさか、犯人がわからんと言つて、お前を拘引する奴もあるまいよ、馬鹿な。」

榎崎は大きな聲で笑ひ出す老侯と共に笑つた。

石渡は益々混乱に陥つた、これで見ると瑠璃子でも無ささうだ、これは絶対に侯爵家とは無関係な事だ。折角此處まで手蔓を伸ばして今ま一と息といふ處で全然見當ちがひである事がわかるとは何事だらう。

「併し。」と彼は又た考へ直した。「あの女は刑事が恐いと言つた、して見ると何か脛に疵があるんだらう、其れだから老侯に頼んで助けて貰はうといふんだ、一日嫉妬に驅られて櫻子を片付け

たものゝ、そこは女だから良心が咎めるんだ、あゝさうだ、それに違ひない、若しさうすると愈々大事件だ、女の手一つで出来る事ぢやなし、誰か男の共犯者があるだらう、其れは誰だらう、靴の形で見ると榎崎らしいが、今の模様では榎崎と瑠璃子と全く関係がないらしい、はてな。」

「考へて来て石渡は今ま一度仔細に榎崎の容子を見届けやうと首を伸ばしかけると突然扉口から又た一人の男が現はれた。石渡は其れを見るなり「あつ。」と驚いた。男は白猫の鍋井である。彼は恭しく老侯に敬禮して瑠璃子にも榎崎にも挨拶した。

「御苦勞だつた。」と榎崎は言つた。

「お電話で、警視廳から参りました。」と鍋井が言つた。

「麻生家の事件ぢやが、夫人の行方は未だ解らんか。」と榎崎が言ふ。

「はい、只今の處では一向手掛りを得ませんが。」と白猫は自家の怠慢を謝する様に言つた、而してちらりと榎崎と老侯の顔を見やつた、此の一瞬間の眼の働きは何とも言へぬ敏捷さと、又た如何なる人物に接しても自分の職掌を忘れぬ老巧さがあつた。

「流石に白猫だ。」と石渡は感歎した。老侯は靜かに眼を閉ぢて居る。室内の光景は何となく沈鬱であつた。

「まあ掛けたまへ。」

榎崎の言葉に白猫は遠慮さうに椅子の端に腰を當て、兩手を膝の上に合せて揉んだ。

「併し、これほどの重大事件が一向見當が付かん様では警視廳の威信に關するぞ。」

「御意の通りにございます。」

「少しもわからんか。」

「はい少しも。」

「だが鑑定は什麼ぢや。」

「ハツ。」

「犯罪の目的が解れば、従つて手掛りを得やうぢやないか。」

「それでございます、いろいろ議論がございしますので……」

「貴公の意見は？」

「はあ。」

「貴公は刑事として敏腕家の稱ある人ぢやないか、一體犯罪人は男か女か。」

「はッ其れは只今確とは申されませんが、私の考は男だと思ひます。」

「男か。」

「はい。」

「女の氣がないか。」

「明日にならなければ解りませんが、多分麻生夫人を人質にして金錢の脅迫狀が參るかと思ひます。」

「はあ、金のために誘拐したんだね。」

「はい。」

「なぜ、他の夫人に手を出さんのぢやろ。」

「それは、麻生夫人は日本の事情に暗いので犯人に取て便利だからでせう。」

「なる程。」と榎崎は首肯いて「なかく慧眼ぢや。」

「どう致しまして。」

「で、行先の見當は？」

「多分此の大森附近……」

「どう言ひかけた鍋井は又もや、素早く相手の顔を見る。橋崎は首肯いたきり何も言はなかつた。」

「あ、大森？」と瑠璃子は大きな聲で言つて「私に嫌疑がかゝらない？」

「御冗談を……」と白猫は笑つて「此の犯罪は確かに金銭が目的です、同僚の中には情事に關係して居ると申す者もありますが、若し其れなら其の前後に何等か情事めいた事がなければなりません、犯人は金が目的ですから夫人の身體を攫つただけで、これは智識階級ではありません、凡て犯罪の目的に……」

石渡は舌打をして横を向いた。鍋井も敏腕家だが、何も侯爵の前で刑事探偵の講釋をしなくとも可いのだ。彼はありたけの智慧を陳列して侯爵に認められ、警視總監にでもして貰はうといふ野心なんだらう、可い物笑ひだ、現在鼻の先に綺麗な顔をして居る犯人が居るのも知らずに。

「馬鹿ッ、いつまで立てるんだ。」

「石渡は吃驚して鉢から飛び降りた。」

「静かにしろ。」

「其れは一つ目の三宅であつた。」

「あ、三宅さんですか。」

「早く逃げやう、危ないから早く。」

一つ目は石渡の手を取る様にして暗がりの植込を潜りく走つた、土蔵の背後に普請場がある、普請場の板塀を軽く押すと道路が見える、二人は其處へ出た。

「どうしたんです。」と石渡は言つた。

「まあ、早く停車場へ行かう。」

無言の儘足運ぶ、二三町来た處で一つ目は「此の事件は止める方が可いよ。」

「なぜですか。」

「深入をするよと飛んでもない事になる。」

「どうして？」

「一つ目は答へなかつた、そして路傍の電燈を數へ始めた。」

「一二三四五……」

一夜を涙に泣き明して百合子は只だ一心に神に祈つた。

「全智全能の神様、貴方は何事も知らざる處なき此の地上の凡てを知ろし召す唯一人の御方で  
 るらつしやいます、どうか私のお姉さまを無事である様に御護り下さい、そして一日も早くお  
 姉さまが家へ歸る事が出来る様にして下さい。」

しろくくと白む二月の寒天は、彼女が熱心に祈る窓を覗いた。机の上やミシン臺や、椅子や  
 腕椅子は其の儘であれど、昨日までにこやかにあつた姉の姿が見えぬ。  
 「お姉さま〜。」

彼女は一二度呼んで見た、いつもなら何處かしら返事があるのだが、空つはな室は只だ隅々  
 に聲が反響するばかりである。

「あ〜〜。」

彼女は泣きながら久子の室を訪ふた。久子は端然として佛壇の下に坐つて居る。切下髪の背  
 後姿が如何にも哀れに見えた。

「お母様！」

久子は黙つて百合子の顔を見やつた、涙が靜かに頬を傳つた。

「私悲しいわ、お母様！」

百合子は慙う言て久子の膝に顔を埋めた。久子は其の背を擦りながら矢張り何んにも言はな  
 かつた。

「どうしたら可いでせうお母様。」

「私達の力では出来ない事です。」

久子は靜かに眼を閉ぢた。そして又た言つた。



「只事でない、只事でない。」

只事でないとは何の意味だか解らなかつた、昨日來た刑事達からは何の報告もない、日本の警察では恧摩事を捨て置くのだらうか。

百合子は居ても立ても居られなかつた。

「私お父様の許へ行って参りますわ。」

「あゝ其れが可い、氣を付けてね。」

百合子の悲みを見るに付けて久子は腸が千切れさうであつた、せめて父の許へでもやつたら多少氣慰みになるだらう、恧う思つて久子は家扶を附添はして自動車に乗せた。

百合子が眞木家の父の室へ入つた時、父は茫然と窓から空を眺めて居た。

「お父様！」

「警察から何とも言て來ないか。」

「えい何とも。」

「さうだらう、怪しからん事だ。」

父は首肯いて下唇を噛んだ。

「刑事も來ませんわ。」

「うむ、さうだらう。」

「お姉さんはどうなすつてでせうねえ。」

「わかつてる、と父は涙聲で言た。私にはちやんと解つてる。」

「お父さんが御存知なの？」

父は黙つて而して唸る様に叫んだ。

「どうすれば可いんだ、私はどうすれば可いんだ。」

片手に胡麻鹽の髪を撈ると、額の皺が一度に亂れて骨高い眉の下に輝く眼に血の色を帯びた。

「なぜ此塵事をするんだ、なぜなぜなぜ……私を……私は國家のために米國から歸つてやつたんだ、生涯を捧げたんだ、其れで澤山だ、私は其れで何も彼も済ましたんだ、其れをなぜ、こんなくこんな……」

恐ろしい持病の喘息が起つた、何か言はうとしては咳き込む、父は壁の上へのた打ち廻つた、

宇多子が来た、醫者も来た、そして注射をした。

「百合さんは？」と彼は喘息が静まつてから言た。

「はい、私よ。」

「おう、百合さん、歸れ、亞米利加へ歸れ、こんな恐ろしい處に居るな、さあ私と一緒に歸らう。」

憊う言て父は又た昏々と眠つた。

眞木男爵の注意で、家令家扶、柔道の心得ある書生の三人を自動車に同乗させて百合子を麻生家へ届けた。

「そんなになくとも可いでせう。」と宇多子は笑ひながら「御心配になるなら此方へ置いたが可いでせう。」

「馬鹿言へ、貴様も廻し者だ。」と男爵は怒鳴つた、夫人に向て亂暴な言葉を吐いたのは是れが初めてである。

彼は其れから又た家令や家扶や書生共を其の儘麻生家に留め置いて百合子の身體を護る様に

命令した。

「怪しい奴が来たら構はんから斬り捨て、しまへ、電話で知らしたら私が直ぐ行て斬てやる。」  
奮ならぬ男爵の昂奮を人々は不思議に思つた。百合子が去てから男爵は獨り書齋に入た、そして何人も入らしめぬ様に申渡した。

百合子は久子の許へ歸つた、依然として久子は佛壇を拜んで居る。

「警察から未だですの？」

「あゝ未だ。」

「御父様の方へも未だですのよ。」

「今日は理事も来ませんよ。」

「どうしたんでせう。」

絶望の上に絶望を重ねて二人は涙さへ出なかつた。そこへ寛の親友野間が来た。野間は昨夜から一睡もせずに警察から警察へ、停車場から停車場へと探し廻つたのであつた、髪は埃じみて眼は充血し、顔の色が蒼白めていかにも疲勞して居る。

「野間さん！」と百合子は嬉しさに呼んだ。實際亞米利加から二人を伴れて来たのも野間である、百合子はあらゆる日本人の中で野間を一番親しき人に思つて居るのだ。

「いや、一縷の望がありますよ。」と野間は元氣さうに言ふ。  
「望があるの？」

「あゝ大いにあります。」

口は重い、それだけに力強い。

「お姉さんは無事？」

「無事無事です、なまに直き伴れて来ますよ。」

久子や百合子の氣を引立てるために慫う言つたものゝ、野間には一向手掛りがないのである。  
「あゝ早く早く早くね。」

「百合さん！」と野間は底力ある聲で言つた。

「僕は誓つてお姉さんを探し出します、僕は昨夜から一睡もしなかつたんです。」

「まあ。」

「今日は會社の方へ四五日の缺勤届を出して置きました。」

「貴方はそんなにしてまで私達を助けて下さるの？」

「さうです百合子さん、僕はね、日本人は悉く悪黨であると貴方方に思はれるのが一番残念です、僕は貴方方のために働くのではありません、日本人の名譽のために……而して親友のために、親友の夫人のために……」

彼は慫う言つて直ぐ立ち上つた。

「では行て参ります。」

「何處へ？」

「兎に角、視聽へ行きます。」

彼は氣輕に麻生家を出た。

「あの方ばかりは本當に親切ですよ。」と久子は涙ぐむで百合子に言つた。

「それは知て居ますわ。」と百合子は、かに頬を染めて言つた「私の一番好きな紳士です。」

豪さうな事を言つて麻生家を出た野間ははたと當惑した。

「これから何處を探さうか、心當りは昨夜中に廻つてしまつたんだ。」

一日を延ばせば一日だけ櫻子の苦痛である、曲者に攫はれて幽閉されて居る人の心持と、一睡もせず涙にかきくれて居る久子や百合子、眞木男爵の心持を察すると野間は片時も猶豫が出来なかつた。彼は直ぐ警視廳へ車を走らした。

警視廳は今戦場の如く混雜して居た、今日は收賄問題を提げて最後の突貫を行ふべく民黨大會が日比谷に開かれんとして居る、日比谷に集まるものは勢に乗じて議會に襲來する、其を如何に食ひ止めやうか、近郷近在の巡查を召集した、刑事巡查のありたけを民衆の中に入り込ました、騎馬で蹴散らさうか、但しは吏黨の壯士を以て二重三重に人垣を作らしめやうか。頃日からの策戦計畫に依て此の潮の如き民衆を阻止すべく警視廳の凡てが熱狂して居る。野間は恰ら軍隊の如く巡查共が靴や佩劍の音をさして湧くが如くに出入して居る石造の廊下を過ぎて受付人の言ふがまゝに刑事部屋の方へ急いだ。

刑事の控室も大方巡查を以て充たされて居た、警視廳に用向があつて出頭した商人風の男や

會社員風の男、但しは婦人などが、身の置き處なさに只だ廊下でうろくして居た。野間は此等の人を掻き分けて係り刑事の主任一つ目の三宅若くは鍋井石渡を探さねばならなかつた。が三人の姿は見えない。

廊下に居る種々な階級の民衆が、何時までも待たされるのでそろ／＼悪口を初め出した。

「今朝なるべく早くといふんでしたから八時に來たんですが、もう二時間も待たされましたよ。」

「お役所で二時間待たされるのは軽い方です、私は頃日裁判所で八時間待たされました、商賣が出来ませんよ。」

「一體政府は人民のための政府なんだか、政府のための人民なのか解りませんな、どうです今度の家屋建築條例は。」

「困りましたな、私も實は其れで來たのですよ。」

五六人が集まつて不平をだら／＼並べ合つてると片隅では洋服の男と和服着流しの男と大きな聲で笑つて居る。

「此の前にね、大臣の夫人が姦通したとかいふ事件が新聞に八釜しかつた時にはね、脚本に姦通といふ言葉は一切禁じたんですよ、今度はね、收賄事件が八釜しいから收賄といふ言葉をどしどし削られるんですよ、其れを削られたら芝居にはなりませんからな。」

「なる程ね、今に一つ目の三宅が警視總監にでもなつたら、東京の人民は皆んな片つ方の眼を潰さなきやなりませんよ、はい、はい。」

何れを見ても不平の聲々が漲つて居る。野間はずくづく政府と人民との調和の困難なを感じた。不圖見ると刑事室の柱の蔭に立つてる二人の男がある、其れは一つ目と石渡であつた、石渡は眞赤な顔をして昂奮の語氣で何か言ふと、一つ目は静かに其れを慰むる様に言ふのであつた。

「そんな事を言た日にやお互の首が千あつても堪らねえ。」

「構ひません、首が飛んだつて構ひません。」

「さう言ふなよ、えい？ 何れ又た可い仕事を目付けてやるからな、どうしたつて仕様のねえ事だ、盗人を捕へて見れば我が子なりてんだ、長いものには巻かれろさ。」

「併し、折角目星が付いたかと思ふと、秘密々々に葬られてしまふと、私は何んにもする氣になれません。」

「若えく」と一つ目は笑つて「我慢しな、俺だつて今まで幾度歯ぎしりしたか知れやしない、法律から見ると大臣だつて元老だつて……だがお前、相手は外國人だらう、そこを考へなきやな、お前だつて日本人だらう。」

「そりやさうだけれども。」

とびくの對話を漏れ聞いただけで野間は能くは解らなかつた。

「なあおい、日本人だらう、可いか。」

一つ目は石渡の肩をほんとはいて向ふへ去た、後で石渡は首を垂れたまゝ考へ込んで居る、そこへ野間が聲を掛けた。

「貴方は石渡刑事でしたね、僕は野間三造といふもので、麻生男爵の友人です。」

「あゝ。」と石渡は夢から覺めた様に眼を睜つて「あの事件ですか。」

「さうです、未だ手掛りがありませんか。」

「さあ。」と石渡は何か言はうとしたが口を結んだ。

「若し手掛りがないとすると、私から特に警視總監にお願したいと思ふのですが。」

「駄目でせう。」と石渡は憤慨する様に言った。

「なぜですか。」

「御氣の毒ですなあ。」

石渡は恚う語氣を轉じた。

「どうしてもわかりませんか。」

「さあ、私からは何にも言へません。」

「なぜですか。」

「私はもう、あの事件の係りを止めました。」

「では三宅刑事ですか。」

「いや、あの人も止めました。」

「では誰ですか。」

「未だ決まらないでせう。多分……あゝ矢張まだ決まらないでせう。」

此時廊下の人々は雪崩を打て走つた、室々の扉からも人が走つた、二階も下も波濤の響が起つた。石渡も野間も人々に押されて離れぬになつた。

「總監が殺られた。」

「いや狂人だ。」

「日比谷から壯士が来たんだ。」

此の聲々が止まぬ中に波濤が再び此方の方へ逆に押し寄せた、靴音、佩劍、其等の騷擾の波の渦巻の中を一人の老紳士が人々に取巻かれて來るのであつた。其れは眞木男爵であつた。野間は思はず人波を掻き分けて進んだ。

「男爵！」

「おう、野間さんか、寛の親友の野間さんか。」

男爵は熱狂的に恚う言つて野間の手をぐつと握つた。

「どうかなさいましたか。」

「は、は、は。」と男爵は蒼白めた顔を上げて高く笑つた。「私は忍ぶだけを忍んだ、此の上は仕方がない、なあ野間君、私は國民でなくても可い、私は娘の父でありたい。」

「お上へ。」と家令の黒川が遮る様に言つた。調査や警部は人々を拂ひ退けた。廊下の隅々に調査が立つた。

「私が總監に談じ込むのが何故不可ないか、娘が誘拐されて其れを探知する事が出来ないといふ法があるか。」

「まあ、お上、此の室で一時御休息になつては如何でございませう。」と家令が言ふ。

「休息？」と男爵は咎める様に言つた。「私は十餘年間休息した、もう休息は出来んよ、警視廳が無能なら私は自分で探索をする、さあ新聞社を廻らう、目白の老翁を訪問しやう。」

温順恭謙な眞木男爵が、自ら警視廳へ出て娘のために總監を詰責した、いかにも其れは親子の情である、さうなければならぬ筈だと野間は思つた。

人々は宥めつ賺しつ男爵を自動車に載せた、男爵は最早や争はなかつた、而して其の色失せた唇を顫はして慙う言つた。

「私は忍ぶだけ忍んだ。」

自動車は走つた、日比谷の方から遠き波濤の如く響く群集のどよめきが聞えた。新たに百人ばかりの巡査が裏門から走り出た。天はかつきりと晴れて、三月の寒い風が道路の埃を吹く。

「もう春だ、凡てが新しくなる事を要求して居る。」

野間は獨り慙う言つて石段を降りた。

何故に二人の刑事が係りを止めたか、野間は慙う思ひながら車を急がせた。

何故に眞木男爵が「忍ぶだけ忍んだ。」と叫んで警視廳に迫つたか。

二つの疑問はどうしても解けない中に車は麻生家へ着いた。久子と百合子は依然として涙ぐむで待て居た。

「どうなすつて？」と百合子は野間の心を讀む様な眼をして言つた。

「これは警視廳の手に一任して置く譯にはいきません。」

野間は慙う言つて、仔細を説明した。

「私達が探しますよ、刑事なんか頼みやしないわ。」と百合子は憤慨の唇を顫はして言つた。

「さうしませう、無論、さうしませう。」

「で、先づ何處へ行たら可いでせう。」

「僕に考があります。」

野間は靜かに計畫を立てた、彼と雖も、此の事に關して知つてゐる事は只だ運轉手から聞いた事實だけである。

元來恠ういふ事件を探偵するに被害者側の考と局外者側の考とは全然異つて居る、局外者は先づ犯罪の性質、加害者の目的を主とする、被害者に取ては目的が何であらうと性質が何であらうと構はない、只だ攫はれた常人を取戻さへすれば可いのだ、野間の考は其れであつた。

「櫻子さんは何處に居るだらう。」

至極簡單な考である、鹿島谷から先は毫しも解らぬとすれば、つまり鹿島谷より以南に違ひない。

第一に大森が疑はしい、併し日本人なら兎も角、一見混血兒だと何人の眼にも解る女を匿へ

ば、近所の人の眼に付かすには居られない、此の弱點を補ふにはなるべく外國人や混血兒の多く居住して居る土地に置かねばならぬ。

野間の此の考は久子や百合子も賛成した、そこで外人の居住して居る處と言へば先づ横濱である、鹿島谷で自動車をごまかして大森から乗たに違ひない。此の想像が誤まつてゐるにしても此の順序から着手する事が差當ての方法である。

「私も行きませう。」と百合子が言った。野間は其れを制めたが肯かない。

「死んでも構ひません、どうせお姉さんが歸つて來ないなら私だつて生きては居られませんから。」

百合子の熱心に久子も遂に同行を承諾した、萬一の用當にと久子は短銃を野間に渡した。

「何とか突きとめるまでは歸りませんから。」と野間は言った。

百合子は身輕に支度をした。二人は大森の停車場に自動車を飛ばした。

「昨日の午前に洋装した婦人が此處から乗車しなかつたですか。」野間が恠う驛員に聞いた時、驛員は暫時頭を傾けて恠う言た。



「あゝ乗りました。」

「乗りましたか、一人で？ 二人で？」

「都合三組ありますよ、五人の外人と一人の外國婦人、其れが一組で。」

「次は？」

「日本の女優らしい婦人と、頭の禿けた老紳士。」

「次は？」

「日本人だか外國人たか解らない様な婦人と軍人の様な男。」

「其れだ。」と野間は勇んで「何處までの切符を買ひました。」

「三組とも横濱です、此の電車は櫻木町までですから。」

「横濱だ。」

二人は横濱へ向つて出發した。

横濱の警察署へ行くと返答は恚うであつた。

「實は此の事件に就て警視廳からの依頼もあり、八方を搜索して居るのだが、今に一向手掛が

ない。」

二人はこれに落膽して其れから居留地を探索した。少しでも疑はしき家、或は珈琲店やレストーランまでも探したが、元より手掛を得やう筈がない。二人は疲れに疲れて海岸へ出た。海にはいろ／＼な汽船が碇泊して居た、或るものは煙を吐き或るものは汽笛を鳴らし、或るものは大きな窓口から荷物を吐き出す、其等の間をうじよ／＼する人夫共は皆んな忙しさに働いて居る、大きな船の下を荷船が幾つもの往來する、三月の天は紫色に黄色を抹して海の上を蔽ふて居ると、水はきら／＼と輝やいて、凡ての船を明るくしたり暗くしたりする。百合子は石の上に腰を下して涙をほろ／＼と零した。

「お姉さまと一緒に櫻府を出た時はやはり慙慙日でしたね。」

「あゝ爾でしたね。」

「デビーが大きなバスケットを提げて見送りに來ました。」

「あゝ。」

「あの時はお姉さんと二人でしたわ。」

野間は黙つた。

「あゝ私達は日本へ来なければ可かつたんですわ。」

「許して下さい、日本人は決して悪人ばかりではないのですから。」

「あゝ私、私、亞米利加へ歸りたい。」

泣き倒れる百合子を扶け起し、勵まし立て、野間は再び停車場へ返す。手掛を得るまでは東

京へ歸らない積であつたが、此の模様では何時まで掛るかかわからない、兎も角百合子を東京の

邸へ送り届けて其れから單獨で今一度來る事だ、野間は慙う決心した。

歩廊に出で野間は百合子を舐はりながら靜に歩み續ける、東京も絶望、横濱も絶望、生み

の父は頼みにならず、姉の良人は留守である、百合子は漸やく十八歳の娘である、四面の暗に

閉された彼女は只だ泣くより他はなかつた。

「どうしても見付からないんでせうか。」

同じ事を繰返しつつ、二人は只だ夢の様に歩廊を往來した。と歩廊の中途に交番の様な

一つの室がある、其れは驛員や信號手などの室で四方に硝子戸を繞らして居る。室の中で一人

が何やら大きな聲を出して語りながら笑つて居る。二人は其の聲に驚いて立止まつた。と此時百合子は消魂しい聲を擧げて叫んだ。

「あらッ、お姉さんのだ。」

「何がです。」と野間は驚いて百合子の顔を見た。

「お姉さんのだ。」

燃ゆる様に見詰める視線は室の中に注がれて居る。

「何がです。」

「洋傘！ 洋傘！」

柄の長い羽二重綾織の水色の洋傘が窓の上に掛けられて居る。

「あれが？」

「あゝさうです。」

野間は躍り上つて室に飛込んだ。

「その洋傘は遺失物ぢやありませんか。」

「さうです。」と驛員は言った。

「昨夜の午前十一時頃？」

「さうです。」

「その婦人は何處へ行きました。」

百合子と野間は聲を揃へて言った。

「さあ、それはわかりませんが、わかつて居れば此の洋傘を渡す筈です。」

いかにも其れは尤もである、遺した當人がわかれば洋傘が此にあるべき筈がない。二人は又失望した、併し既に櫻子が此處まで来た事が分明である以上は搜索の手掛も從つて順序が立て能くなる。百合子は洋傘を手にとり取て幾度も擴けたり窄めたりした、流石に昨日まで姉が手にして居たのだと思へば懐かしさが胸いつぱいになつて又しても涙が零れる。

「其の電車は此處で終りでしたか。」

野間は此の機を逸さじと鋭どく訊き始めた。

「さうです。」

「凡ての人が此處で降りたのですか。」

「さうです、併し乗替がありますから。」

「なる程、乗替がある。」

落膽しつけた人は小さい事にも落膽したり又た喜んだりする癖が付くものである、野間は重ねて訊く。

「乗替は？」

「十一時頃には横須賀、國府津、神戸！」

「あゝ。」

二人は同時に聲を擧げた。若し神戸行に乗たのなら、逆も探索が出来ない。

「其の電車の着くと同時に乗替へるとすれば何處行の汽車でせうか。」

「さあ。」と驛員は天井の方を見て「直ぐ間に合へば横須賀です。」

「横須賀？」

「さうです。」

「横須賀？」

「さうです」

「横須賀？」

同じ事を幾度も繰返すので驛員は野間の顔をちろりと見やつて忌々しさうに特別な大きな聲で答へた。

「さうですよツ。」

氣が付いて野間は笑つた、百合子も笑つた、其れは極めて自然な笑ひであつた、心の底に一道の光、明を認めた喜びの含んだ笑ひ！

二人は直ぐ横須賀行の汽車に乗た。併し野間は又た考へた。横須賀行に乗たとしても、途中で下車したかも知れぬ。大船、鎌倉、逗子、其等を探索するにも中々容易な事ではない。彼は慙う思ひながらも百合子には一切を秘した。

横須賀驛へ着いたのはもう日もとつぷりと暮れて切開いた崖山の上から寒い風が吹いて来る頃であつた。二人は驛員に聞いた。

「日本人一人と洋装した婦人が昨日此の驛で下車しましたか。」

「そんな事はありません。」と驛員が答へた、横須賀は軍港である、外人の往來には特に注意して居るので、驛員の言ふ處は全然信用して差支ないと野間は思つた。

「どうですお疲れでせうから此處へ泊りませうか。」と彼は百合子に言た。

「いえ私は疲れて居ませんけれども……」と百合子は残念さうに言た。出来る事なら今少し手掛を得てから休息したい、慙ういふ心持は野間にも讀まれた。

「では引返させよう。」

二人は再び東京行に乗た。

「どうしても中心點は大船だ。」

彼は慙う思ふた。そこで二人は大船で下車した、停車場前の汚らしい宿屋に一泊した、そして緩々明日の計畫を講ずる事とした。だが夕飯が済むと野間は百合子を一人宿屋に残して警察へ出掛けた。町の隅々までも歩き廻つた。がどうしても手掛がない。

「明日中には屹度探し出しますよ百合さん。」と彼は言た。

「私も明日は屹度見付かる様な気がします。」と百合子が言った。  
遠い、濤聲は終夜二人の夢を襲ふた。

翌くる朝早く二人は今ま一度大船の警察署を訪ねたが要領を得ない、そこで鎌倉を探し廻る事にした。若し鎌倉でも手掛がなければ國府津、箱根、神戸までも行かねばならぬ。鎌倉は二人の天王山であつた。

鎌倉と言つても藤澤から由井ヶ濱、長谷、材木座、八幡下、これも中々容易な事ではない。二人が先づ困つた事は、何人に限らず日が経つに従つて記憶が衰へる事である、昨日が一昨日になると、人々の頭から段々に遠ざかつて行く。驛員に訊くと、

「此の停車場は西洋人が毎日何十人来るか知れやしません。」と言ふ。外人の遊覽所たる此土地は他の土地よりも搜索に困難である。併し野間は怯まなかつた、彼は疲れた百合子を介抱しながら、確乎と順序を立てた。彼は藤澤及び鎌倉に居住する十餘の外國人を一つくりに訪問しやうと決心した。其れは怎ういふ理由からである。

外國人は親切である、そして人の秘密をも能く守る、又たこれが正義であると信じた場合に

は何物をも恐れず正義を貫徹する。

これに對して日本人は凡て不親切である、表面だけの世話をするが心の底は利己的である、而して正義の信念が薄弱で、何事に付けても係り合ひを恐れたり他人の思惑を憚つたりする。

外國人は記憶力が確實である、日本人は健忘性である。  
一人の混血兒の行方が知れないので探しに参りましたと言へば外國人は我が身につまされて同情の餘り盡力してくれるが、日本人は、

「混血兒なんかどうでも可い。」といふ風に冷淡である。  
外國人は外を歩いてても同人種に出逢へば懐かしさを以て見送る、それだけ旅の空にあるものは故郷の人が懐かしいのだ。

これ等の點から野間は外人訪問に出掛けた。此の邊の外人は多くは横濱に商店を有て居るものが多い、五六の外人に會つたが一向要領を得なかつた。二人は長谷の下で一人の若い米國人に逢つた、其の人は怎う言つた。

「神様にお祈りなさい、神様は屹度お護り下さるでせう。」

野間は馬鹿々々しい事を言ふ人だと思つた、正午になつたので二人は其處の旅館で晝飯を食べて居た。と彼の外人が二人の休息所を探してやつて來た。

「私は今車夫に訊きました、一昨日の正午頃一人の婦人と一人の日本人が此の松原で電車から降りたさうです、そして婦人はひどく衰弱して幾度も倒れさうになつたのを男が介抱しながら歩いて行たさうです、失禮ながら其の婦人は妊娠中ぢやありませんか。」

「さうです。」と野間は答へた。

「それに違ひありませんわ。」と百合子も言つた。

「何方の方へ行たでせう。」

「其れは車夫も知らないさうです。」

「では兎も角も此の松原の附近ですね。」

「神様は屹度お護り下さる。」

若き米國人は堅い握手を百合子と交はして去た。

「親切な方ですね。」と百合子は興奮した體で言つた。「日本人はあんなに親切でないわ。」

野間は耳まで振くして頭を垂れた、實際其れに違ひない、其れにしても自分だけは生命にかけて櫻十を救ひ出さねばならぬ。

「お二人の事はお願ひしましたよ。」と言つたデビーの姿が眼先にちらついた。

「もう大丈夫ですよ、恙う段々搜索の範圍が狭くなれば今日中にはわかります。」

「あゝ、うれしいわ、私お姉さんに會へたら。」

百合子は疲れを忘れて躍り上つた。

松原を中心として八方にある旅館料理屋だけでも百に近い、二人は其れを調べなければならぬ。併し二人の勇氣は少しも失せなかつた。二人は一生懸命に戸別に尋ね廻つた。宿屋といふ宿屋は盡くした、此の上は普通の人家に就て訊くばかりである。

日は暮れかけるに従つて二人の氣は益々苛立た、今日中に探し當てると勇み立た、晝の中の望みは全く絶えて、前途に擴がるものは只だ暗い海の面であつた。

「大丈夫だ。」と勵まし立てる野間の聲も次第に力なくなつた。二人は互ひの悲み互ひの失望を視して黙つて路を歩いた。日はとつぷりと暮れた、烈しい潮風が松並木を鳴らして薄暗い

電燈が處ろ處ろに寒さうに見える。

「何處へ行きませう。」

「何處へでも行かう。」

二人は歩き續けた、連日の疲れと失望に百合子はもう蒼白になつた、而して折りく、漲る様に歎歎りあけるのであつた。

「大丈夫ですよ。」と野間は猶も續けた、而して百合子の腕を自分の首に絡まして、其の胴體を支へる様に助けた。二人は段々山路に差しかゝつた。

「どうしたんだらう。」

二人が氣が注いで踏み戻らうとした時一人の女がさつ／＼と急いで行くのに出會つた。

「此處を行くとは何處へ出ますか。」と野間は訊いた、實際何處にでもあれ、百合子を休息させねばならないのであつた。

「何處へも行かれませんよ、病院の他は。」と女は忙がしさうに答へた。

「病院ですつて？」

「あ、此の上は狂癡病院です。」

女はさつさと去てしまつた。命は人れ草履をぬいて左にたれり

「さあ戻りませう、狂癡病院へ行つても仕様がなない。」と野間が言つた。わだかまをいさめ

「あ、少し休まして。」 (すぢは化者の積城あり)

百合子は松の根に腰を掛けたが、ぐたりと野間の膝に凭れた。

「疲れましたらう。」

「いゝえく。」 眞暗な闇の底、二人の足元に海が渦巻いて居る、恐ろしく暖かい潮風がごう／＼と萬樹を鳴

らすと、黒い雲が星の顔を慌たしく飛ばす。 暴風雨が來さうだ。」と野間が言つた。海の間には一點の舟火も見えない、潮は鳴る、ごう／＼

と鳴る。 ほちり／＼と大粒の雨が降つた。

「大變だ、さあ行きませう。」

『休まして。』といふ百合子の聲は消え入るばかりであつた。

『百合子さん。』

額に手を當てると冷たい汗を掻いて居る、ぶる／＼顫へるのが野間の膝にも響く、手を取て見ると氷の如く冷たい。

『さあ私の背中に。』

野間は確と百合子を負ふたが、此の時休へきれない様な雨がざあつと降り出した、あらゆる樹木が縦横に揉まれて首筋を切る様に冷たい空気が葉から葉へと渡る。

『あ、行くにも行かれない。』

野間は暗を透して上の方を見た、其處に樵夫の小屋か、水茶屋の毀れの様な小さな建物があるらしい。彼は自分の外套を百合子の頭から被せて、攀登つた。いかにも其れは夏になると水茶屋にするか、但しは何處かの亭の様なものであつた。家根があるのは無いよりも増である、彼は其處にある丸太棒を二三本並べて床を作つた、其の上には板を載せて菰を敷いた、雨が入らぬ様に今一枚の菰を軒に垂れた、而して百合子を抱いて其處に坐つた、雨は命々降り募る。

天は漆の様に暗い、峙り立つ萬樹は揉みに揉まれて瀟壁に叩きつけられたかと思ふと直ぐ虚空へ煽り上げられる、其の度毎に枝の裂ける音、大石の轉がる音が聞える、足元には只だ眞黒な幾萬の牛馬が狂ひ廻る様な波濤の音、其れが岸を打つ度に坤軸が揺ぐばかりの響を立てる。野間は片膝を立て、百合子を横に抱いた、注ぎ来る雨に濡らさじと彼は百合子の背中に自分の外套を掛け、其の上から確と抱きしめた。

『ありがたう／＼。』と百合子は微かに言た。

『今に晴れますよ、安心してね。』と野間は小聲に囁やいた。

『えい大丈夫よ。』

百合子は微笑して見せた、が雨は中々止みさうにもない、風聲濤聲恰らの戦場の様な騒がしさは何時までも續いた。

『もう雪が切れさうなものだ。』

野間は淋しく木の間を透した、妖魔の翼の様な雲は重く海に垂れて海の水を吸ひ上げては吐き出し吐き出しては又た吸ひ上げる、星の影一つだに見えない。



彼は百合子が段々弱り行く事を感じた、寧ろ此の雨を犯して下の人家へ飛び込まうか、さうしなければ百合子は凍えて死ぬだらう、彼は恚う決心した。

「百合さん、下へ降りませう、少しの間だから我慢して下さいね。」

「もう少し恚うして置いて、もう少し。」と百合子は言った。「私眠くなつたわ。」

「眠つちや不可せんよ。」と野間は聲を勵まして言った。寒氣と疲勞に襲はれた時、其の儘眠ると死んでしまふ、其れは彼が學生時代に日本アルプス探検の際に経験した事である。ほんの荒い風にも當らずに育つた深窓の少女！ 脆さは風前の花に同じである。

「あ、眠いわ。」

「眠つちや不可せん、もう少し我慢して。」

と見ると百合子の顔は氷の如く冷たい、全身は恰ら瘡の如く顫へて居る。

「しつかりしてね、百合さん。」

彼は一枚の上着を脱いで短衣一つになつた、而して百合子の靴を脱がして、上衣を以て足を包んだ、其れから彼は衣匣から藥瓶に入れて來た葡萄酒を出したが、百合子は最早齒をくひし

ばつて開かなかつた。

「百合さん、しつかりして、百合さん。」

「あ、大丈夫よ。」

恚ういふ聲も殆んど夢中である、全身が縮の如くぐたりとなると彼女は野間の首筋に絡んだ手を離して、する／＼と膝を滑つた。

「あ、百合さん。」

又しても狂ひに狂へる嵐は萬樹を搖がして叫喚の聲を擧げる、はざりと掛筵が地に落ち、雨は容赦もなく二人の身體を注ぐ。

「あ、無慈悲な神よ。」と野間は天の一方を睨んで叫んだ「此小さな少女が目に見えないのか、遙かに父を尋ねて日本の國土へ來た此の少女を、如何なれば日本八百萬の神が斯くまで迫害するか、止めい／＼嵐を止めい、お前達が平素自慢する如く日本は神の國であるなら此の嵐を止めい、無慈悲な乞食の神共！ 俺の言ふ事に腹が立つなら俺を八つ裂にしろ、そして此の少女だけを助ける。」

彼は自分の短衣まで脱いで襦袢一つとなつた、氷を削る寒風凍雨も彼の熱した身體には冷たくなかつた、彼は百合子を靜かに外套の上へに寝させた、そして其の胸を披いた、闇にも白き少女の肌が彼の眼に輝いた、彼は流石に躊躇したが、一氣に肌の手を差し入れた、而して柔かな襦袢の上から摩擦し始めた。

『助けてくれ、此の少女を助ける信實がなければ日本は今日から神の國ぢやない。』  
彼は怒りと呪ひに胸を躍らしながら、靜かにく、而して順次に急速力を加へて百合子の背中から胸を摩擦した。

上衣に包んだ二つの足は我が腹の處に暖める、而して一呼一吸、我が骨と肉と血の續かん限りと百合子を撫で上げ撫で下ろす、彼の眼は怒りの炎に燃えて、彼の血は此只だの少女の生命の上に漲つた。彼の耳には嵐の音も波の響も聞えない、只だ其の微かな少女の呼吸ばかりである。

氷の如く冷却した百合子の身體は次第に微温を帯びて來た、死の如く閉ざした心臓の鼓動も聞える。

『もう少しだ……やい乞食の神共！ しつかりやつてくれ。』

彼は勇みに勇んで手を休めなかつた、次第々々に呼吸が正しくなつた、最初は大きいのが二つ三つ、次は靜かに鼻を漏れる。

『しめたく。』

彼は喜び極まつて涙をほろく零した、そして慌たしく葡萄酒を取上げた。

『百合さん。』

『はい。』

『口を開いて……口を。』

百合子は微かに口を開いた、夜眼にもしるき花の苔！ わづかに色づける唇から白い齒が漏れる。葡萄酒が注ぎ込まれた。

『もう大丈夫だ。』

野間はその儘百合子を抱きしめた。而して其の顔を自分の肩に凭れさせた。仄かに温い體温は次第に野間の肩に胸に揺れうつる。

百合子は悲心地である、初め彼女は嵐の音と波の音とを聞きながら段々地の底へ引込まれる様な気がした。眠つちや不可い〜といふ聲も聞いた、だが其れは殆んど別な國からの聲の様であつた。

突然として音楽の響が起つた、其はベニシヤの村の寺院で行はれる聖餐式の音楽であつた、窓々は朝日の光に輝やいて居る、白い髻の牧師が居る、其の周圍には母のロザリーも居る櫻子も居る、デビーも居る、而して父も居る寛も居る、讚美歌が嵐の如く起つた。牧師は祈禱をした、そして聖餐が開かれやうとした時、牧師の背後から聲が聞えた。

「お待ちなさい、もう一人の兄弟が来るまで。」

聲の方を見ると其れは荆の冠を被つた基督であつた。人々は禮拜した、と反對の方から一人の人が現はれた、雨にびしょ濡れに濡れた襯衣一枚を着て居る。

「こちらへ〜。」と基督は言た、男は首垂れて壇上に立た、基督は「百合子さん。」と呼んだ、百合子は進んだ、二人は並んで立たされた、そして百合子は男の腕に凭れた時、男は野間であつた。百合子ははつと思つた。途端にいと柔らかな何とも知れぬ水が喉を通つたと思つた、眼を

開くと野間の雨に濡れた頬が、ひたと我が頬に接して居た。百合子は聲を立てずに其の胸に顔を埋めた。

嵐は又たく〜吹いて來た、野間は黙つて百合子を抱いて居た。容赦なき雨が二人の頭に顔に注いだ。雪は次第に疾くなつて雨は途切れ〜になつた。

此時何處からともなく唄の聲が聞えた。

「あらッ。」

百合子は脱兎の如く跳ね起きた。

「お姉さんだ、お姉さんの聲だ。」

「あ〜。」と野間も立上つて耳を欬だてた。嵐は止んで月が海を照らした。凄愴として唄が聞える。

My bonnie lies over the ocean,

My bonnie lies over the sea;

My bonnie lies over the ocean,

Oh, bring back my bonnie to me.

bring back, bring back, bring back my bonnie to me, to me; —

嵐の後の海面の月夜！ 其れは何といふ凄婉な夜であつたらう、樹々の梢は裂け、枝は垂れ下がり傷ましい傷口は眞白に露はれて居る、岩も土も雨に洗はれて大きな石や倒れた樹木は恰ら戦後の屍の様な様、而して濁つた海水は未だく、退いてやらぬぞと威嚇する様に崩れた岸をどしん／＼と打つては勝鬨を揚げて居る。天地間のあらゆるものを脅迫し破壊し盡くした後の惨澹たる光景の上に、靜かに遠慮深さうに青白い月が雲間から光を投げる。其れは恰ら、彼の無頼漢の嵐共が蹂躪し去つた後を詫びるかの如く又た慈悲の背を垂れて此の傷ましき負傷者を慰むるかの如く。

恐ろしく疾い雲は月の前を飛んで行く、其の度毎に海はきら／＼と輝やいたり又た暗くなつたりする、揉みに揉まれた樹々は疲れて青白い顔をして溜息を吐くと、崩れた岸はどうでも勝手にしろと言はぬばかり波に弄ばれて居る。

縦横に挫かれた地上の屍を照らす月光に沁み込む様に唄が益々聞える。其れは船に乗って遠

く去た我が子を思ふ痛切な涙の唄！ 海に訴へ風に訴へ、枕に泣き夢に泣く、萬斛の思ひを載せた此の唄が樹々の露と渦巻く潮の上を渡つて咽び泣きの様に迫つて来る。

Oh, blow, ye winds, over the ocean;

And blow, ye winds, over the Sea;

Bring back, bring back, bring back

My bonnie to me, to me; —

「お姉さんだ、あ、お姉さん！」

百合子は慙う繰返した、そして立停まつて又た耳を欬だてる。

「おう、お姉さん！」

百合子は氣狂はしけに呼んだ。そして唄つた。

Bring back, bring back, bring back to me;

向ふの唄ははたと止んだ。

bring back, my sister to me;

百合子は泣きながら唄つた。そして又た耳を教てる。bring back——といふ聲は恐ろしい熱氣を帯びて聞えて来る、百合子は走つた、野間も走つた。聲は山の半腹の松の間から聞ゆる。松の間を滑りく、二人は滑つては轉び、轉んでは又た起ち上つて走つた。唄は急に止んだ。

『しまつた。』と野間は叫んだ。『さあ何處だらう。』

『唄ひませうく、 Last night as I lay on my pillow……I dreamed that my bonnie was dead. bring back——』

微かにく、プリングバツクといふ聲が聞えた、其處は石塀を高く繞らした洋館の一構である、凡ての窓々が鎖されて、只だ一つ……二階の一番端れの窓だけが月に照されて硝子が光つて居る。

『あ、此處だ。』

『プリングバツク。』と百合子は石塀の下から唄つた。

『おう。』

何ものにも響へ様のない喜びと驚きの聲が窓の上にとつた、蒼白い櫻子の顔は鐵の格子の間から見える。

『おう、お姉様。』と百合子は嬉し涙に咽びながら叫んだ。

『百合さん、私の百合さん。』と櫻子は言った。

『私は出て行けない、私は……』

『憚う言つた時、彼女はわつと泣き出した。』

『待つてゐらつしやい、僕等が行く。』と野間が叫んだ。

二人は宙を飛んで表口へ廻つた。

表へ廻つて見ると岩疊な石造の堀の間に鐵扉の門がある、門の頂きに圓い電燈がある、而して其れは門柱の表札を照らして居る。

『鎌倉病院！』

二人は吃驚して顔を見合せた、健全な櫻子がどうして狂癲病院に入れられたのだらう。此の點に於て不安な恐るべき陰謀が含まれて居る事が明かである。野間は直ぐに鈴を押した、中々

出て来さうにもない、門と玄關とは餘程隔たつて其處に松や雑木が爪先上りに茂つて居る。二人は代る／＼に鈴を押して耳を欵てた。微かに砂利を踏む足音が聞えた。

「誰方ですか。」

夜廻りの爺らしい者が、小倉の詰襟の洋服に下駄を穿いて、背後に手を拱んで屈み腰にやつて来る。

「急用ですがね、一寸門を開けて下さい。」

「さあ。」と爺は中々二人に近付かずに此方を見透かす様にして用心深く言た。

「時間外ですからな。」

「時間外でも急用です。」

「患者ですか。」

「さうです。」

「伴れて来たんですか、今夜は醫員の人は誰も居ませんよ。」

「いや入院してる人に逢ひたいんです。」

「入院の患者さん、とんでもない事だ、夜中に門を開けたら患者さんが皆んな眼を覺まして飛び出します。」

「そんな事があるもんか。」

「この病院は何だと思つてるんです、狂人ばかりの病院ですよ、飛出されたら私の落度です、明日の朝お出なさい。」

「朝まで待たれないんだ。」

「私の方でも開けられません。」

「さう言はずに、一寸で可いからね。」

「規則ですからね。」

「規則だつて病人には規則がないよ。」

「一體誰方ですか。」

「麻生さんの夫人にお目に掛りたいんだ。」

「はてな、そんな人は此處に居ませんよ。」

「いや確かに居る、一昨日此處へ来た筈だ。」

「一昨日? はてな。」

「今ま窓から顔を出して唄つて居た。」

「あゝ、あの唄つてる患者ですか、あれは不可せん。」  
爺は仰山らしく驚いて言た。

「どうして不可いのか。」

「特別患者ですから。」

「特別? 特別とは、特別に嚴重にするのか特別に親切にするのか。」

「何方も同じ事です。」

爺はさつさと去りかける。

「待てくれ。」と野間は鐵の柵を揺りながら叫んだ。「どうしても不可いのか。」

「心配しなされるなよ、患者さんは皆な能く眠つて居ます、御用があるなら明日の朝!」  
彼は中途で立停まつて空を仰ぎ、あゝ、と大きな口を開いて欠伸をしたが「あゝ、可い應梅

に嵐が止んだ。」

「怨う言てずんく引込んでしまつた。」

「お爺さんく。」と呼んだが答がない。

「どうしませう。」と百合子は言た。

「仕方がありません、塀を踰える事は容易ですが、此の様子では中々室へは入れますまい、併し此處に居る事が解つたから今夜は此の儘宿へ歸つて明日の朝早く来る事にしませう。」

「さうするより仕方がありませんわ。」

野間は百合子の身體を心配した、百合子は充分疲勞して居る。

二人は再び元の窓の下の處へ來た。窓からは最早櫻子の姿が見えない。

「お姉さん。」と百合子は叫んだ、答がない。

「マイボンニー。」と唄つて見た、矢張答がない。

「諦めて眠つたんですわ。」

折角上と下とに月光で顔を合はせながら手を取て語る事も出来ない。二人は振り返りく、此處

を去た。

うとく／＼と眠つたかと思ふと野間は眼を覺ました、夜は既に明け放れて、薄ら寒い三月の天が白く輝いて居た。百合子は既に起きて化粧を済ました處である。

「あ、貴方は疲れませんでしたか。」

「えい、お姉さんに會へるかと思ふと寝んで居られませんかよ。」

いかにも道理だと思つた、身體は綿の如く疲れても彼女は嬉しさと安心に顔は輝いて居る。

野間も急いで起きて食事を済ました。外へ出ると松の並木や雑木林に澤山の小鳥が啼いて居る、草は築土から塀の下から又た藪の間から早くも春風の誘ふに任せて若やかな色を見せて居る。

「お姉さんが待て被居るでせうね。」

「櫻子さんも昨夜どんなに嬉しかつたでせう。」

二人の話は只だ其ればかりであつた。

「併し。」と野間は言た「櫻子さんを脳病院に入れたのは何者でせう。」

「さあ、何か事情があるんですわ。」

「櫻子さんに會へば解りますね、僕は其れが解つたら其儘にしては置きませんよ。」

「無論です、私は復讐します、屹度私は復讐します。」

「實に恐ろしい事をする。」

野間は心の底から曲者の惡辣さに驚いた。何の理由かは知らないが、狂癲病院に入れるとは

實際巧妙な手段である。

恚う思つた時彼は思はず慄然して思はず、

「あつ。」と叫んだ。顔色は土の如くである。

「どうなすつて？」

「しまつた。」

「どうして？」

「昨夜の中に何處かへ運ばれやしませんか、僕等に見付かつたと知たら屹度何處かへ轉送するでせう。」

「さう言へば、二度目の時お姉さんは窓の處に被居やらなかつたわ、聲をかけても御返事がな



「いんですもの。」

「さうだ、あゝ僕は張番して居れば可かつたんだ。」

若し百合子が疲勞して居なかつたら野間は終夜張番して居たのであつた、彼は慙う思ふと片時も猶豫が出来なかつた。

「走りませう。」

「えい、續く限り。」

二人は走つた。極森寺、腰越の山は左までに高くはないが、坂を登るには中々苦しい、昨夜からの疲勞と不安、流石に百合子は後れ勝であつた。

「さあ腕を組みませう。」

野間は百合子を介抱しながら坂を走り登つた。

と見ると鐵の門が開かれてある、玄關には人々の姿も見える、野間は突然靴の儘玄關に跳り上つた。

「あゝもしく〜。」と若い醫員が二人、受附口から顔を出して言った。

「誰何に御用會ですか、ロザリーといふんぢやないんですか。」

「それです。」

「どうぞ、こちらへ。」

受 係は首垂れて言った。

「お氣の毒ですね。」

「なに？」

「今朝程死なれました。」

「死んだ？」

「はい、實にお氣の毒で。」

二人は吃驚して顔を見合せた。

「どうして〜〜。」

「今ま院長がお目にかゝるさうです。」

百合子はよろ〜と野間の腕に凭れた。

六疊の室——日本風の室——に銘仙の夜具を敷いて、其處に櫻子は靜かに眠つて居る、窓から射し込む朝日は日蔽に遮られて裏地の青みが白い顔に反映して居る、髪は解けて亂れて居るが、顔は大理石の様に白く、唇の紅るだけが未だまざくと物を言ひさう。百合子は一と眼見るなり叫んだ。

「お姉さん……Oh, My Sister!」

夜具を刎ねのけて姉の胸に抱き付き、其の頬に額に狂的に接吻する、櫻子の顔は冷たい、其の半ば閉ざした眼は恰らに妹を見詰むるが様。

「何か言て頂戴! お姉さん、何か言て!」

百合子は涙も出さずに叫んだ。櫻子は矢張り黙つて居る。

「何も言はないの? 言へないの? あゝもう言へないの? 本當に! 本當に何も言へないの?」

百合子は初めて泣き出した。一昨夜の朝には機嫌よく二人で語り合つた此の姉が、今ま斯の如く氷の如く沈黙してしまふとは何事であるか。昨夜は聲を聞いた、窓の格子から月の光りに

まざくと見えた。百合さんと云つた、私は出て行かれないと云つた、其の聲は今も耳に残つて居る、あれきりだ、それより他は、これから永久に聲を聞く事が出来ないのだ。

野間は黙つてほろりと涙を零して居る。

「昨夜塀を乗り越えて来たならば……」

「どうもな、私は困つて居ます。」

院長は憐れう言つた。此の院長といふのは恐ろしく身丈の高い、ひよろくと瘦せた六十近い老人で、耳が遠いので人の話は聞かずに自分だけの事を言ひ續ける。院長の話に依ると患者姓名簿には、東京京橋區築地、牧師フロレンスの令嬢ロザリーとしてある、附添の人の言葉に依ると或る日本の不良な青年と通じて妊娠中青年に捨てられたので發狂したといふのだ。そして絶えず青年の名を呼び續けて泣く、其の青年は身分の貴い家に生れた人なので姓名は言はれぬが、費用はいかほどでも構はないから充分満足する様に看護してくれ、併し如何なる人が来て面會を求めても決して面會さしてくれない、これだけの條件で入院したのだが、いかにも右の

男の言ふ如く泣いてばかり居る、極度のヒステリーだらうから其の手當をしながら経過を見て居たのだ、すると昨夜は嵐の最中に脱出を企てた、いろく宥めると能く観念して床に就いたが、突然唄を唄ひ出した、唄が止むと間もなく分娩が迫つて来た。其れは如何にも突然であるので院長は産婆を呼びにやつた、病院とは言ふもの、産科に就ては素人である、處が産婆は中來ない、烈しい苦惱が初まつた。

「妹が待て居ます、妹の處へ行きたい、堀の外に妹が居ます、妹を呼んで下さい。」  
 恚う言ひ續けた。其は精神に異状があるためだと院長は思つた。併しどうかして生みたい、満足に生みたい、恚ういふ氣が非常な勇氣を起さしたと見える。

「上六番町、麻生々々。」と彼女は夢の様に言つた。「子供だけは届けて、麻生の家へ。」  
 産婆の來た時には既に前後不覺であつた。

「これでは母體が危ない。」と産婆が言つた。手術をするより他に途がない。幾度か眠に落ちやうとする櫻子を勵まして産婆は手術を以て胎兒を取出した、無論胎兒が生きやうとは思はなかつた。

「あゝ神様！ お母様！」と櫻子は叫んだ。そして胎兒の産聲を聞くと等しく再び「神様！」と叫んだ。其れから後は聲がなくなつた。靜かな微笑が唇に浮んだ。死んだらうと思つた胎兒は生きて居る、半ば死にかけて虫の様に生きて居る。

院長の語る事毎に二人は驚いた。

「死亡の原因は？」と野間が筆談を以て訊く。

「出血多量でせうな。」

「附添の男はどんな人でしたか。」

「色の黒い。」恚う言つて院長は「充分記憶しません、患者に氣が取られて居ますから。」と附加へた。

「よろしい、それは警察で調べればわかる事だ。」と野間は忌々しげに言つた。

「そして嬰兒は？」

「それ其處に居ます。」

院長は櫻子の屍の傍を指さした。いかにも其處に小蒲團の上に眞白な木綿の着物を着せて頭

を綿に包んだ一つの物體があつた。百合子は直ぐに傍に寄つた、而して其の顔を凝と見た。眼鼻形は純然たる白人的で姉に似て居るが、額や腮は紫色の斑點があつて喉は重く腫れ、深く深く刻んだ皺にも充血した色が認められる、如何に生れる時に苦しかつたかは是を以ても想像する事が出来る。死んでるのか生きてるのか解らない、只呼吸も無き一塊の肉が轉がつてる様！

「どうしたんでせう。」と彼女は驚いて看護婦に言つた。

「呼吸がどうも變ですよ。」

「なぜ早く手當をしてくれないの？」

「お母さんの方に氣が取られて居たもんですから。」

嬰兒は折り／＼びくり／＼と魔える様に動く、其れが呼吸であつた、顔色は土の如く唇は既に石の如く白んで居る。

「どうしたんでせう、早く／＼。」

百合子に促がされて看護婦は醫者を呼びに行つた。

「どうも其れは止むを得ますまい、腦が悪い様ですから、難産で以て頭を壓搾されたらしいで

す。」と院長は言つた。

「二人とも死ぬんですか、此の病院は二人とも殺すのですか。」と野間が怒鳴つた。

「私がします。」と百合子は嬰兒を抱き上げた。

「私が生かしてやりませう。」

彼女は醫術に就ては全く盲目である、併し彼女は狂癲病院の醫者には逆も治療が出来ないと見て見た。

「暖爐を焚いて下さい、而してお湯を湧かして、其れが済んだら誰も此の室へ来ては不可せん、皆んな出て行って下さい。」

野間は百合子の興奮した状態を只だ氣遣はしけに見やつた。だが彼は何も言はなかつた、暖爐に火が燃えた、凡ての人は立去つた。百合子は嬰兒を凝と眺めてほろ／＼と涙を零した。

「生きて頂戴よ、ねえ、お願いだから生きて頂戴ね。」

彼女は慌た／＼しく自分の上着の釦を外した、而してスカートやベチコートの釦も外した、一枚の襦袢を寛げると、櫻色を帯びた純白の肌が少しづつ露はれる、少女の半裸體、其れほど羞か

しい事はない、だが彼女は其れも忘れた、殆んど全裸體になりかけて彼女が嬰兒の紐を解いた、ふわ／＼とした柔かな豆腐の様な肉、腹は三角に擠せて脚は木の枝の様、靜かに擡けても首がぐら／＼する、彼女は其れを裸にして自分の胸にひたと抱き入れた、而して背後を毛布に包んだ。嬰兒の手も足も冷たかつた、彼は自分の柔らかな胸が嬰兒を壓促しはしまいかを氣遣つた、而して自分の乳房の下に嬰兒を當て、徐か／＼呼吸をした、暖爐が室内を暖めた、百合子の深呼吸は百合子の血管を昇騰せしめた。一分二分三分……見る／＼百合子の皮膚は櫻色を抹して圓みを帯びた肩から首筋まで紅くなつた。

裸體の少女が裸體の嬰兒を抱いて凝と其の眼を見詰めて居る、百合子の全身が熱するに伴れ嬰兒の身體が次第に温かくなつて來た、

『生きて頂戴ね、生きて。』

實に彼女の一心は只だ嬰兒の生命の上に注がれて居る、血管の暖かさ、心臟の鼓動、呼吸の響き、嬰兒に感じたのは單に其ればかりではない。どうしても……生命に賭けても生かしてやらうといふ百合子の靈が嬰兒の小さな靈を呼び戻した。血と血の響き、肉と肉の響き、生命と

生命の響きである。

『お前の肌にびつたりと着いて居る此の私の肌は日本人に呪はれて居る白人の血が通ふて居る肌なんだよ。』

彼女は慙う腹の中で言た。

『誰あれもお前を抱いてくれない、日本人の肌はお前を暖めてくれない、お前と同じ血を以てるお前のお母さんは死んでしまつた、お母さんと同じ血を以てお前を暖めてあげるのは只だ私だけだ、さうだ此の私だけなんだよ、私はお前のお母さんなんだ、生きておくれ、ね、生きておくれ。』

嬰兒の皮膚は柔らかに暖かくなつた、其の蒼白めた顔は次第に紅を帯びて來た、而して腫れ上つた眼を開かうとする如く微かにしよほ／＼させるかと思ふと何か叫びたけに口を動かすべく努める様子が見える。

『眼を開きたいの？ 聲を出したいの？』

虫の如き小さなものは何も答へなかつた。百合子は其儘嬰兒を毛布の上に寝かした、而して

彼は其れに吾が肌を寄り添はせながら片手を以て全身を摩擦した、初めは静かに次第々々に速度を加へる、而して其の小さな足を少しづつ、曲けたり伸ばしたりした。而して嬰兒の口に我が唇を接けて静かに呼吸を吹き込んだ。

突然として不可思議な叫びが起つた、いかに其れが靈氣と光明と希望に満ちた聲であるか！地上の幸福を握るべく、而して地上に幸福を與ふべき使命を帯びた神の子か、但しは此の社會を呪ひ人類を呪ひ、闇の底に蹲くまつて羽搏きする岩窟の蝙蝠の如き惡魔の使徒か。

兎に角地上に現はれた第一聲！ 生れた子には何んの考もないかも知れぬが百合子の胸は歡喜に躍つた、彼は『おや。』と言たきり手を休めて嬰兒の顔を見詰めた。其れは如何にも自然な如何にも高貴な處女の微笑であつた、彼女の美しい皮膚は今春にならんとする三月の天色を吸ひ込む窓からの光りに輝いた、嬰兒の身體も活々と輝いた。

「あゝ生きた、よく生きてくれた。」

我が生命を吹き入れて人の生命を生かした喜び！ 其れほど偉大な喜びは又とあらうか。私の子だ、あゝお前は私の子だ。」

彼女は恚う言て又た接吻した、と彼女は初めて自分の裸體に氣が付いた、彼女は急に羞かしくなつて四邊を見廻した、而して慌たしく嬰兒に着物を着せてから自分も着初めた。着物を着る間にも彼女の眼は嬰兒を離れなかつた。着終つてから彼女は雲時の間嬰兒を見詰めて居た。嬰兒は男である、其の泣聲は恐ろしい強さを以て恰かも今まで懐へく居た堤が裂れた様に泣き續ける。

百合子は起て扉を開けた、其處に野間が立て居た。

「お入りなさい。」

「おう、生きましたね。」

野間も驚異と歡喜の聲を擧げた。と又た急に首垂れる。

「櫻子さんには聞えないでせうね。」

「あゝ。」と百合子は今までの張り詰めた氣が弛んで姉の顔に我が頬を接けた。

「お姉さん、赤ちやんの聲を聞いてやつて頂戴、赤ちやんが呼んで居ます、呼んで居ます。」  
蘇生した赤兒の傍に櫻子は冷たく眠つて居る、若し彼女が生きて居るなら、彼女は妹の功

勢に對してどんなに感謝したであらう。呼べども叫べども櫻子は沈黙して居る、永久の沈黙！百合子は氣を取直して起ち上つた。彼女はもう今までの様な無邪氣な快活な小娘ではなかつた。俄然と降り來つた姉の死、今後の孤獨、現下の責任、そのために彼女の心は一躍して大人の如くなつた。彼女の胸の中には極めて莊嚴な而して戰慄すべき一種の感情が往來した、それは何であるかは彼女自身に意識しなかつた、彼女は又たそれを考へやうとも思はなかつた。

「お母さまの處へ電話を掛けて頂戴ね。」

「あゝ、さうだ、僕はほんやりして居ました。」

野間は室を出た、百合子は其の間に看護婦に命じて湯と酒精やサルチル酸を取寄せた。

「貴方は彼方へ行て下さい。」

彼女は嚴重に看護婦を遠ざけた、姉の髪の毛一筋なりとも他人の手に觸らせたくなかつたのである。彼女は扉を堅く鎖して姉の顔や手足や、凡てを拭き取つた、而して其れは専門の醫師も及ばぬ程の細心な注意を以て姉の身體を綺麗に淨めた、彼女は姉の指先を淨める時に其の手に擦過いた薄い傷があるのを見た。爪の間に鐵の錆があるのを見た。其れは窓の格子に攫つて

脱走しやうとしたのだらうと思つた時に百合子は又しても泣かすには居られなかつた。

「窓から飛び降りる位は何でもないのだが、お腹の子に過失があつては不可いと思つて辛抱してゐらしたのだわ。」

彼女は姉がいかにも悶へ苦んだかを知た。窓から顔を出して唄つて居たのは救ひを求むる聲であつたのだ。

野間は澤山の薔薇の花を買來た、百合子は其れを以て姉の顔となく胸となく、凡てを飾つた。

「せめて綺麗にしてあげませう。」

二人は枕を飾る時百合子は不圖壁の裾に氣が付いた、其處に髮針が一本落ちてゐる。彼女は其れを取上げて顔を起す途端に青い壁に極めて薄く刻つた字が眼に觸れた。

O. God! O. God! God! G.....

「おや！」と百合子は眼を睜つた。

「お姉さんだわ。」

「あゝ。」

野間も齊しく眼を睜つた。

「神様にお願しても聴入れて下さらなかつたんですね。」と百合子は言った。

「可哀さうですな、實に残酷だ。」と野間も共に泣いた。

「神様が無いのですわ。」

百合子は突然叫んだ。野間は驚いて顔を擧げた。

「神様はないのです。」と百合子は再び言った。其顔は蒼白になつて眼は異様に輝いた。

『Reangel』（復讐！）

彼女は慙う言てばたと倒れた。野間は驚いて扶け起した。彼女は何にも言はなかつた。

電話に依て麻生家から老母や家令が來た、眞木男爵夫婦もやつて來た。流石に人々は奇異の感に打たれた。

「勘忍してくれ、櫻子さん。」と眞木男爵は櫻子の屍に抱き付いて言った。「私は父たる資格がない、此の申譯は屹度する、屹度々々屹度する。」

久子はもう正體なく泣き崩れた、人々の歎きの中に百合子は最早や泣かなかつた、彼女は一言も言はなかつた。

九

極めて不可思議な葬式が行はれた。丁度櫻子の屍體を鎌倉から運んだ其の夜寛は東京へ着いた、彼の驚きは筆紙に盡し得べくもない、今まで怵へくた母の久子も父の眞木男爵も寛の顔を見るなり泣き倒れた。

「面目ない、勘忍して下さい。」

久子も男爵も慙う寛に言た。寛は涙さへ出なかつた。人々の涙の中にも百合子は亦た一滴の涙も零さなかつた。彼女は人々の慰藉を逃れて一室に赤兒ばかりを護つて居た。彼女の顔は蒼白めて彼女の眼は恰らに獵人を見詰める牝虎の如き猜疑の色があつた。彼女は寛に何か言はれて一言も答へなかつた。只だ彼女は野間に慙う言た。



「日本人は恐ろしい。」

弔問の人々を避けて寛は獨り櫻子の室に入った。別れてから三ヶ月、九十日の長さは一年にも餘る氣持がしたが、室は依然として元の儘である、共に茶を啜つた卓子は元の形に元の卓子掛を掛けてある、丸い小さな卓子にはいつもの編み針を刺したまゝ、毛糸の珠が載せられてある、ソファには二つの枕袋が相對して居る、其處に二人が腰を下していつまで滌らぬ愛の言葉を囁き合つたものだ。棚の上のいろ／＼な細かい裝飾品や、壁に掛けた上衣や外套や、日本着物などまで、凡てが十二月以前の儘であるが、優しい聲と美しい姿とは永久に見る事が出来ない。彼は上衣や着物や手袋や其の一つ／＼に熱烈な接吻をした、而して其の香をじつと嗅いでる中に、衝き上げる様な悲みが胸を搾つて来る。彼は寢榻に俯伏して泣いた。別室では親戚の人達が集まつて葬儀に就て相談をして居た。麻生家の嫁ですから麻生家の墓地へ神道を以て葬りませうと老刀自の久子が言つた。

「併し未だ入籍になつて居ませんから。」と親戚の一人が言ふ。

「それでは私の娘だから私の墓地へ禪葬でやりませう。」と眞木男爵が言ふ。

「でも私の方へも入籍になつて居ませんよ。」と宇多子夫人が言ふ。

「籍などは構ひません。」と久子が何か憤るものゝ如く言ふ。

「さうです。」と男爵も言つた。併し多數は其れに反對した。で到頭百合子の意見も訊く事にした。百合子は冷かに人々を見廻はした。

「お姉さまが愛する人の御意見にお任せなすつて下さい。」

人々は寛を室に迎へた、寛は黙つて人々の説を聞いた。而して慙う言つた。

「僕は櫻子さんを僕の妻と認めます、そして妻の信ずる宗教に依て葬ります。」

いろ／＼な反對論があつた、併し寛は一言も言はなかつた。

「十字架を葬具屋に誂へて下さい。」

死因は何であるか？ 醫者の診斷書は難産のためとある、だが櫻子がどうして鎌倉の狂癪病

院に入れられたのか、警察は何故嚴重に其れを調べないのか、なぜ此の事を新聞紙にも秘密にしたのか。疑へば際限もない此の怪しき前後の事情に就ては何の諒解もない中に葬式がどしどし行はれた。

會葬者の凡てが疑問に裏まれた、而して互ひに黙々の間に葬儀が終つた。百合子の學校からは同級生を率ゐて教師の米國人が四五名も見えた。彼等は熱心に讚美歌を唄つた、涙を垂れて祈禱をした、其の聲は靜かな墓地を流れて遙かの林に轟いた。

「まあいやでございますね、外國人なぞが來ると今までの事が皆な知れるぢやありませんか。」と宇多子は忌々しげに眞木男爵に囁いた。

眞木男爵は首を掉た。

「いや、あの人は親切だ。」

宇多子は何か言はうとした時又たく／＼讚美歌が起つたので身慄して眉を擧めた。敬虔と同情に富んだ若き女學生の聲は死せる櫻子の靈にしみ／＼と沁み入る様に思はれた。

「あの方が本當かも知らん。」

男爵は眼を垂れて胸に手を置いた。

悲みの中にも寛は憤懣の念に堪へなかつた、我が不在を覗つて妻を誘拐し去つた者は何者であるか、これを探查して恨みを晴さすには居られない。彼は警視廳へ掛合つたが目下嚴探中と

ばかりで要領を得ない、眞木男爵に訊ねると男爵は殆んど喪心の體で何を言つても呆然して居る。

「何者だらう、何のためだらう。」

五里霧中の間に月日は經てゆく。櫻子の忘れ形見は作良と名づけた、百合子は一生懸命に作良を育てた、彼女は四圍の人々が悉く自分を迫害して居る様に思はれた、今まで快活で子供らしかつた彼女は急に大人びて十歳も年老た様になつた、沈黙で用心深くて其の紅の唇から白い齒が洩る、事はなかつた。朝に學校へ行く時には作良を久子の手に渡して慙う言ふ。

「決して／＼外へ出さない様にして頂戴ね。」

學校から歸ると直ぐ乳母の室へ入って作良の警護をする風であつた。乳母は幾度も變つた、其れは周旋屋に頼んだり、知人に頼んだりしたのだが、どうせ乳母にならうといふ女に碌なものはない、私通して男に捨てられた者とか、亭主が放蕩で飛出したものとか、食ふに困つて我が子を里親へ遣つて給金を當てに來る者とか、其等は大抵行儀が悪く、氣が僻んで、而も申合せた様に不規則で責任觀念に乏しい、甚だしきは乳量の非常に少ないものが多量と偽るものもある、嬰兒の養育といふ大任を忘れて自分だけの骨盜みをするものもある、もつと甚だしきに至

ると作良が少し馴染む様になると其れに乗じて給金を居直るものもある、勝手に赤兒を棄て、出て行くものもある。是等の不徳義な女どもを見るに付けて百合子が日本人を嫌ふ情は一層甚しくなつた。で彼は恚う決心した。

「乳母は廢めて私が育てませう。」

未だ十八歳の少女である、どうして赤兒を育てる事が出来やう、久子も寛も其れに反對したけれども彼女は聽かなかつた。

「私は日本人を信ずる事は出来ません。」

彼女は學校を退學した、而して専門の醫者に就て精しく研究の上我が手に作良を引取た。其れは殆んど何人も驚歎すべき程であつた、朝となく晝となく夜となく彼女の手は赤兒を離れなかつた。

寛は只だ茫然と氣抜けのした人の様に其日々々を暮した、彼は赤兒の事よりも寧ろ死んだ櫻子の事で胸が充滿であつた。此の子を産んだために櫻子が死んだのだ、此の子があるために櫻子が窓から脱れ得なかつたのだ、恚ういふ愚痴も起つた。

「僕は取殘された人間だ。」

陰鬱な日を送りつゝある中にも彼が只だ慰むる處は百合子があるためであつた。父の眞木男爵は屢々百合子に眞木家へ歸れと勧めたが百合子は肯かなかつた。彼女は赤兒をあやしなから米國の子守唄を唄ふ、其の聲はいかにも穏やかで哀れ深くて人間と人間の情の流れを揺ぶつて行く様に思はれる。其れが止むと彼女は靜かに寛の室に入つて来る、そして眠入つた作良の顔を見せる様に差し出して凝と涙ぐむのであつた。其の度毎に寛も涙をこぼした。

「お姉さんが生きてゐらしたらね。」

彼女は恚う言ふ。

「あゝ、せめてもう一と月でも……」

百合子が姉を思ふ情、寛が妻を思ふ情、二つの心は死んだ櫻子の上に結び付いて互ひに沈黙の中に涙を流すのであつた。

久子は折り／＼此の二人が涙に暮れて居るのを見た、而して百合子が我が子の如く作良を育てるのを見るに付けて其の老いたる胸の中に將來の事を描かざるを得なかつた。

「出来る事なら二人を夫婦にしたい。」

夏が来た。櫻子の墓には手向の花が毎も絶えないが、櫻子の死に就ても何人も語るものがなくなつた。墓標は石碑に變はり、新らしき土に草が生えて、紀念に植ゑた藤は垣根に蔓を卷付けてる様になると、記憶が次第に世間の新たな噂と共に消えてゆく。

六番町の麻生家のみは依然として肅やかであるが、作良が呱呱の啼き聲に一時の陰氣から復されて、久子と百合子は其の養育に其日々々の喜びも憂ひも、一人の赤兒があればこそ賑やかである。

庭の泉水に瀧が落ちて池に浮く睡蓮の花園はに、黄色いや、褐色に緑の深い葉が、一ぱいに光を受けて居ると思ひ出した様に金魚が跳ねる。

長い縁側に簾を垂れて青畳を吹き抜ける涼しい風を浴びながら久子は淋しさうに庭を見やつた。彼女は例に依て寛の歸宅を待て居るのである。此の日頃又しても寛は夜泊り日泊りをして居る、稀に歸ると晝寢をして夜になると又た飛び出す。

「無理もない事だ、戀女房と半年添ふて妙な別れになつたのだから。」

母の情として怨うは思ふものゝ、左りとしては親類の評判、世間の噂も聞き捨てには出来ない、新橋赤坂と遊び廻るにしても物には程合のあるものだ、私は兎も角も、未だ十八やそこらの百合さんに赤兒を押し付けて、自分だけが勝手氣儘の放蕩三昧とは餘りに蟲が好過る、歸つたらば言てやらう、言はねばならぬ事だ。

其れにしても差向き決めねばならぬのは後妻の事だ、眞木さんに話をしたら瑠璃子さんが可いだらうといふだけで其の他の事は何も言はなかつた、多分櫻子さんで懲りたから百合さんを妻はずのが厭なんだらう、其れも道理だが、出来る事なら百合さんにしたい、併し椿侯爵の心持は矢張り瑠璃子さんにあるんだから、これも一概に斷る事は出来ない。

久子が怨う考へて居る處へ靜かな足音が聞えた。

「小母さま！ 小母さま！ あら一人でつくねんとして被居やるのね。」

「あゝ瑠璃子さんですか。」

「あゝ、随分暑いわね。」

瑠璃子は髪を詰めた英吉利卷の様な淡泊した髪をして、水草模様の上布に紹の帯を締めてい